蔵数立野遺跡

福岡県筑後市大字蔵数所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書
第81集

2007
筑後市教育委員会

くらかずたての
蔵数立野遺跡

2007
筑後市教育委員会

序

蔵数地区は当市の北部に位置し、八女丘陵上の台地に所在しております。古くから稲作や果樹等の農耕に富んだ地であり、近年では人口増や開発により自然と街が一体化した田園都市として栄えております。

この蔵数地区の歴史については、古くからその存在を指摘され、発掘調査から当市最古の石器の出土や、特に弥生時代から古墳時代にかけての大集落が形成されるなど、遥か古代の生活の一端が明らかになっております。

今回の調査は九州新幹線建設に伴い破壊を受ける路線部分の調査であります。遺跡からは弥生時代を中心に明治時代の近代資料まで確認され、その歴史の長さや重みを感じ得る調査となりました。

発掘調査に際しましては、各関係機関に多大なるご理解、ご支援をいただきましたことに心から感謝申し上げます。

平成19年3月

筑後市教育委員会
教育長　城戸一男

例言

1. 本書は平成17年度に筑後市教育委員会が行った蔵数立野遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物、図面、写真等は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第Ⅰ章に記している。

3. 本書に使用した図面の遺構図は上村英士が作成し、レンガ構造物の測量・図化は写測エンジニアリング（株）に委託した。また現地の基準点・水準点測量をアジア航測（株）に委託した。遺物の実測、浄書は整理委託事業として(財)元興寺文化財研究所　仲文恵　横井理絵　猿渡式子　丸山裕見子が行った。

4. 本書に使用した遺構・遺物の写真撮影は上村が行った。

5. 今回の調査に用いた測量座標は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基準としている。

6. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による（筑後市における埋蔵文化財の取り扱いについて：2002に準拠している）。
SI - 竪穴住居　SD - 溝　SK - 土壙　SP - ピット
また、本文中の出土遺物について○×○の表記は両方の可能性が考えられるという意味である。

7. 本書の編集、執筆は上村が行った。

目次

Ⅰ. 調査経過と組織・・・

Ⅰ．調査経過と組織

蔵数立野遺跡は筑後市大字蔵数字立野に所在する。九州新幹線建設に伴い開発原因者である独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構との工事工程などに関する協議が平成00年00月に福岡県教育委員会、筑後市教育委員会出席のもと行われ、平成00年00月福岡県教育委員会による試掘・確認調査が行われた。試掘・確認調査の結果から遺構が確認された箇所について筑後市教育委員会が本調査を行う事で合意し、平成18年1月から平成18年2月まで現地での本調査を行い、整理報告書作成作業を平成19年3月31日に完了した。

発掘調査に関わる調査組織は以下のとおりである。

1）平成17年度（調査）

総括	教育長	城戸　一男
	教育部長	菰原　　修
庶務	社会教育課長	田中　僚一
	文化スポーツ係長	角　　恵子
	文化スポーツ係	永見　秀徳
	（文化財担当職員）	小林　勇作
		上村　英士（本調査担当）
		阿比留士朗

2）平成18年度（報告書作成）

総括	教育長	城戸　一男
	教育部長	平野　正道
	社会教育課長	田中　僚一
	文化スポーツ係長	北島　鈴美
	文化スポーツ係	永見　秀徳
	（文化財担当職員）	小林　勇作
		上村　英士（報告書担当）
		阿比留士朗（～6月30日）

3）発掘調査参加者

地元有志

4）整理作業参加者

整理補助員　丸山　裕見子　猿渡　式子

整理作業員　横溝　愛

調査及び整理作業に際しては次の方々にご指導、ご教示を賜った。記して心より感謝申し上げます。（順不同、敬称略）

中島恒次郎、山村信榮（太宰府市教育委員会）狭川真一（財団法人元興寺文化財研究所）坂井義哉（大牟田市教育委員会）

Ⅱ．位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑紫平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、潅漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中心部に形成されている。

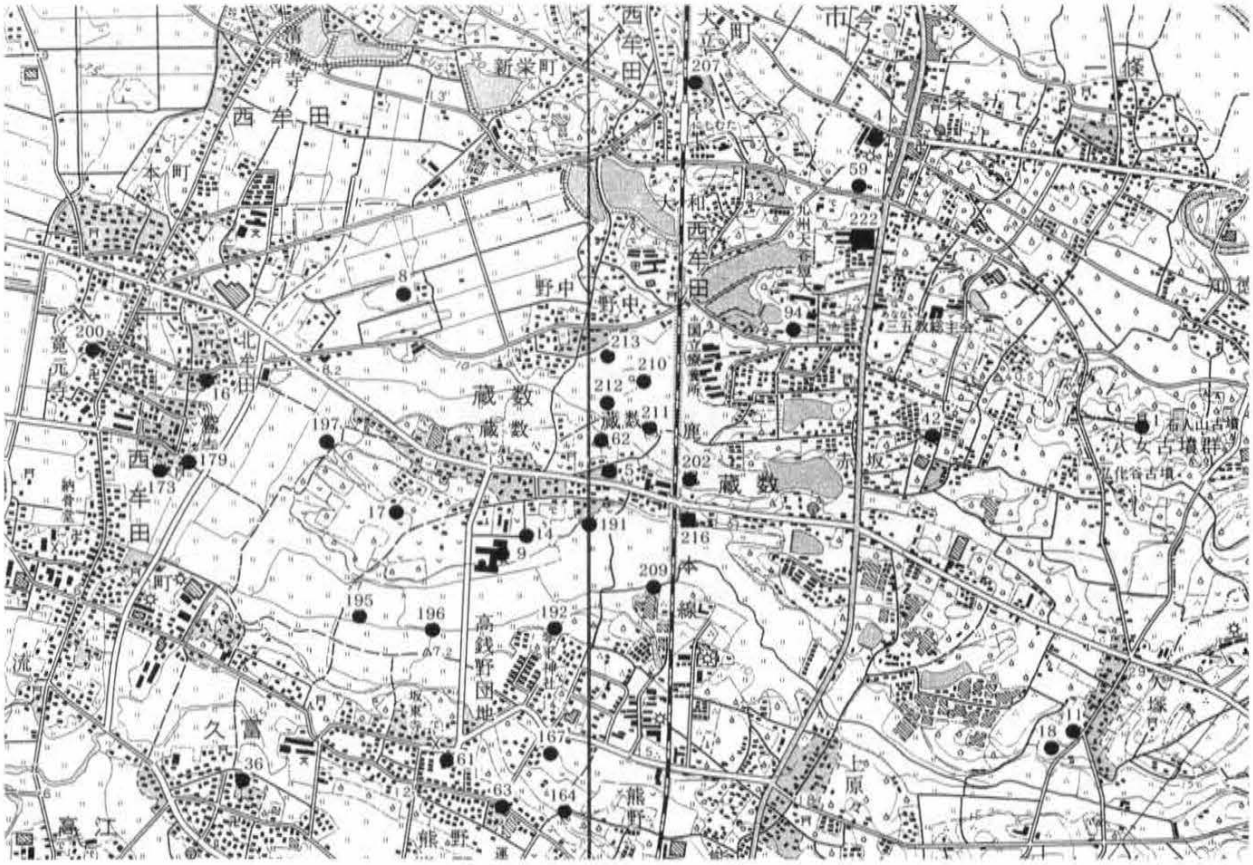


Fig.1　周辺遺跡分布図（1/25000）

1. 石人山古墳
4. 瑞王寺古墳
5. 蔵数東屋敷遺跡第1次
8. 田佛遺跡
9. 蔵数森ノ木遺跡第1次
11. 欠塚古墳
14. 蔵数森ノ木遺跡第2次
16. 西牟田鷲寺遺跡
17. 蔵数坂口遺跡
18. 前津塚山遺跡
36. 久富鳥居遺跡
42. 蔵数赤坂遺跡
59. 西牟田清徳浦遺跡
61. 熊野屋敷遺跡
62. 蔵数東ノ屋敷遺跡第2次
63. 熊野屋敷遺跡第2次
94. 蔵数長原山遺跡
164. 熊野塚根遺跡
167. 熊野山ノ前遺跡
173. 西牟田小次郎丸遺跡
174. 西牟田上京手遺跡
179. 西牟田鷲寺東遺跡
191. 熊野水町遺跡
192. 熊野松ノ下遺跡
195. 熊野五反田遺跡
196. 熊野宮ノ後遺跡
197. 蔵数島崎田遺跡
200. 西牟田寛元寺遺跡
202. 蔵数保古手遺跡第1次
207. 西牟田銭亀遺跡
209. 熊野柝町遺跡
210. 蔵数島ノ本遺跡
211. 蔵数保古手遺跡第2次
212. 蔵数三郎丸遺跡
213. 蔵数長畝町遺跡
222. 蔵数大谷遺跡
216. 蔵数立野遺跡

Ⅲ．調査成果

(1)　はじめに

調査区は遺跡範囲である約300㎡を設定した。現況は標高約12m～15m程の南に傾斜する畑である。遺構の掘削は表土から遺構面までを（有）フクシマ重機（代表　井上広志）に委託し、遺構面からは地元作業員による手作業の掘削を行った。

調査は平成18年1月から行い、平成18年2月末に終了した。

層位は約35㎝～40㎝の耕作土下に約10～35㎝の茶色土の包含層（弥生時代～古墳時代の遺物を含む）を検出し、茶色土除去後、明茶色土の地山を確認した。遺構は明茶色土の地山に切り込む形で検出している。調査区南端では明茶色土の上に茶黒色土の包含層ないしは整地層と考えられる層も検出している。

検出した遺構は竪穴住居、土壙、ピット、溝である。後述するが、調査区は現在のJR鹿児島本線線路と平行に設定されており、線路を敷設する際に（明治20年前後と思われる）線路を横切る水路を線路下部に抜くための水路（暗渠）を検出している。

Fig.2　調査地点位置図（1/2500）

Fig.3　調査区　基本土層図

(2)　検出遺構

土壙

SK05（Fig.4、Pla.2～8）

平面形態が円形を呈し、両サイドが突起状に張り出す土壙である。検出幅約2.65m、張り出し状部分径約3.25mを測る。3面の床状の面（掘り直しかは不明）を確認しており、1･2面の底部は硬化している。また、張り出し状部分の底部も硬化している。断面形状は1・2面で擂鉢状を呈し、3面で逆台形を呈する。1面の底部付近の2箇所で奥行き約0.5m程の横穴状のピットを検出した。遺物は弥生土器甕、サヌカイト石鏃、黒曜石剥片、サヌカイト剥片を出土している。

SK05

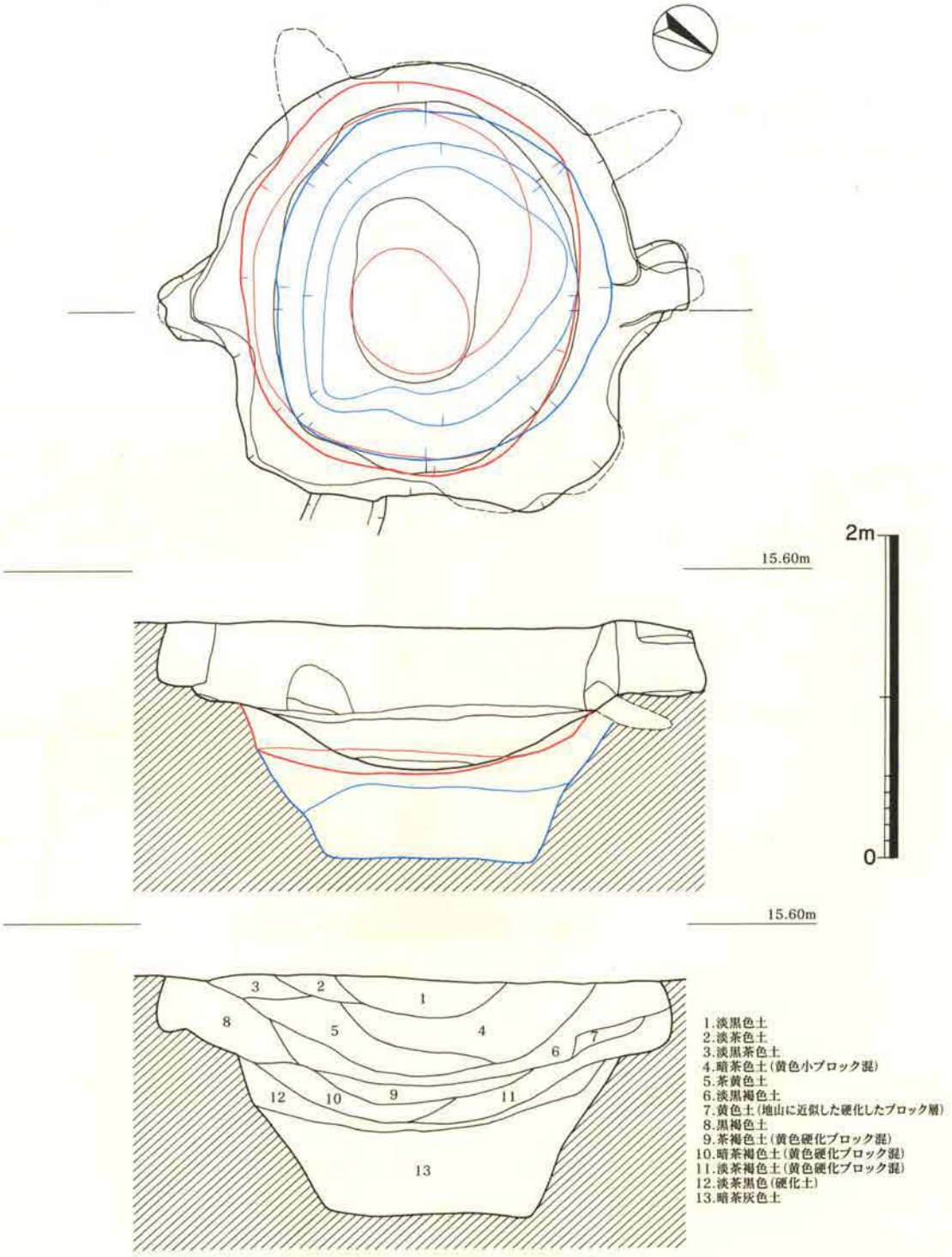


Fig.4　SK05 実測図（1/40）

SK15（Fig.5、Pla.8・9）

調査区中央で検出した長方形の土壙である。検出長軸約1.45m、短軸約0.7m、深さ約0.6mを測り、長軸がほぼ東西をとる。両サイドがテラス状に掘られており、北西隅には壁面から横方向にピット状に掘られる。このピット状の遺構の埋土は炭化物や焼土、砂が多く入る。遺構埋土は比較的軟質で、壙底はテラスも含め硬化している。遺物は弥生土器片、サヌカイト片、石製品を出土している。

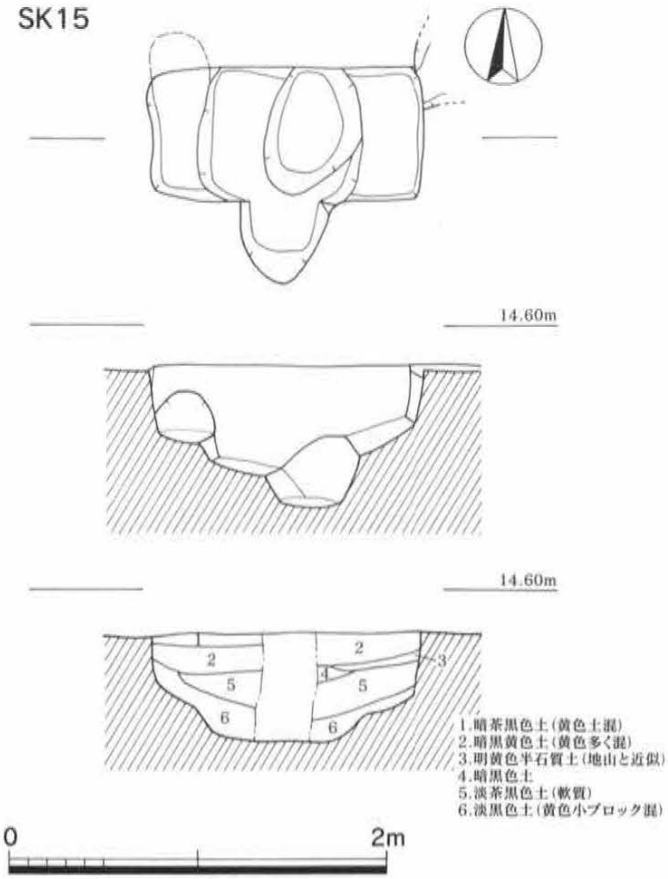


Fig.5　SK15 実測図（1/40）

竪穴住居

SI01（Fig.6、Pla.10～13）

調査区北端に位置する正方形の住居である。検出軸約4.4m、床面までの深さ最大0.44mを測り、掘り方深さ約0.48mを測る。北東壁面付近に灰色粘土が付けられ、その南側に炉もしくは竈と考えられる焼土痕跡と土製の支脚が添え付けられている。床面の状況は北東部分に幅約0.9m、深さ約0.21mの土壙が存在し、4本柱となる柱穴が存在する。床面でほぼ完形の高坏が5個割れた状態で検出された。床面を掘削後、南西隅で長軸約1.75m、短軸約0.9m、深さ約0.27mの隅丸長方形の土壙を確認した。また、柱穴ではない複数のピットも確認している。遺物は覆土から弥生土器甕、土師器坏、高坏、甑、ミニュチュア土器、サヌカイト剥片、滑石製臼玉、床面から土師器坏、高坏、南西隅土壙から土師器甕を出土している。

SI10（Fig.7、Pla.13～15）

調査区北側のSK05南側に位置し、調査区内では遺構の約1/3程度の検出に留まった。円形の住居と考えられ、検出最大長約5.75m、床面までの最大深さ約0.2m、、掘り方深さ約0.23mを測る。床面は若干硬化しており、柱穴と考えられるピットを2箇所確認している。床面除去後にSI50を検出している。遺物は覆土から弥生土器甕、サヌカイト石鏃・剥片、黒曜石剥片、床面からサヌカイト剥片を出土している。

SI50（Fig.7、Pla.13～15）

SI10床面除去後に検出した遺構である。円形と考えられ、検出最大長約3.85m、床面までの最大深さ約0.12m、掘り方深さ約0.13mを測る。床面は硬化している。遺物はサヌカイト剥片を出土している。

SI20（Fig.8、Pla.16～18）

調査区中央で検出した正方形に近い小型の住居跡である。検出長軸約2.15m、検出短軸約2.05m、硬化した床面は存在しない。掘り方深さ約0.4mを測る。埋土に遺物が殆ど含まれず、掘り方底部で完形の甕が1点横倒しの状態で検出し、隣でピットを検出している。埋土には焼土や炭化物が含まれる。

SI25（Fig.9、Pla.19～21）

調査区南側で検出した円形と考えられる住居跡である。遺構の南半分が溝（レンガ構造物とセットの水路）に切られており、SI45を切る。検出最大長約4.5m、掘り方深さ約0.45mを測る。遺物は弥生土器甕、サヌカイト石鏃、黒曜石剥片、サヌカイト剥片が出土している。

SI45（Fig.9、Pla.19～21）

SI25に切られている住居跡である。東側および南側は撹乱と溝に切られている。検出長軸約2.2m、短軸約2.1m、床面までの最大深さ約0.45m、掘り方深さ約0.48mを測る。

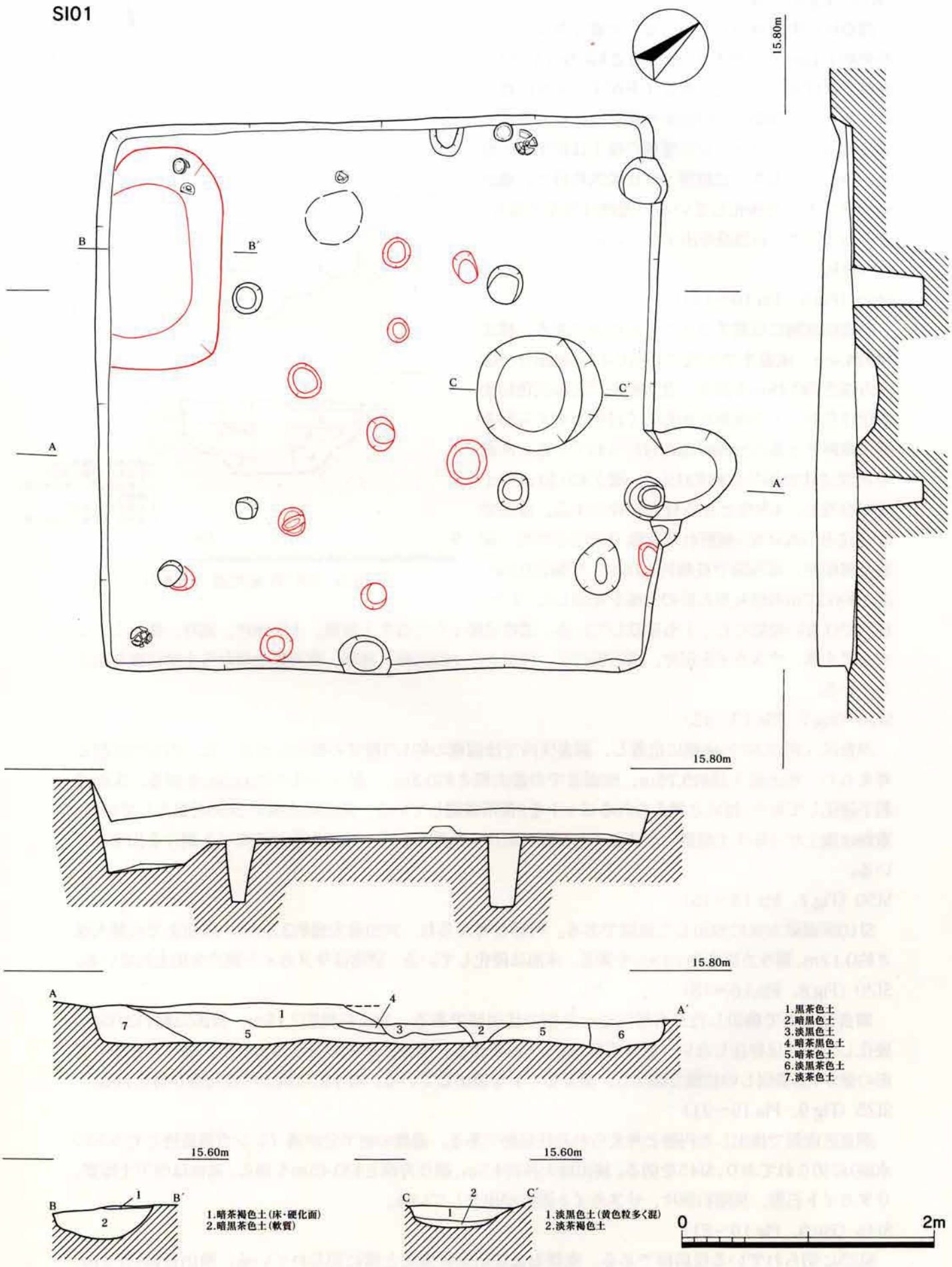
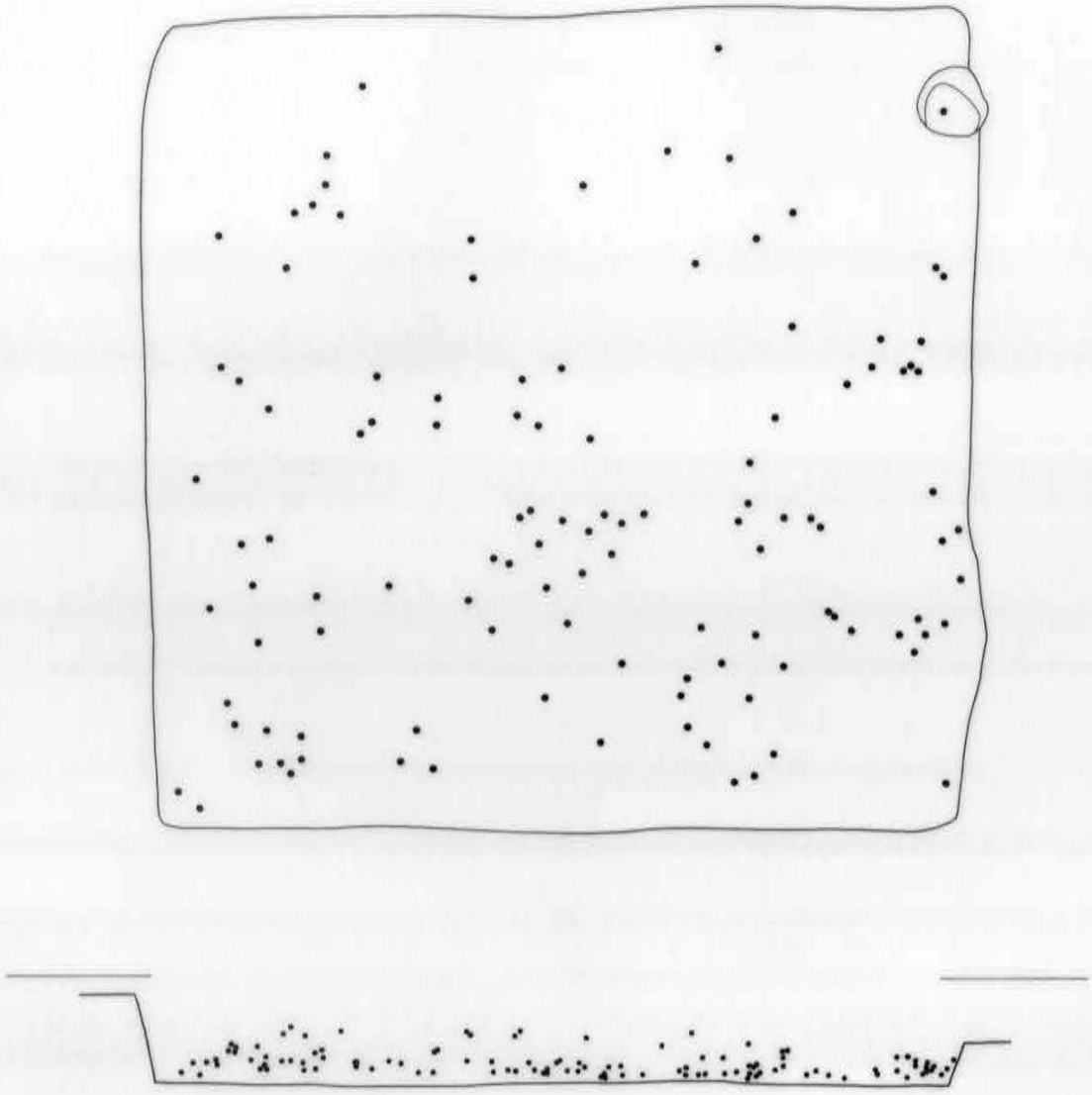


Fig.6　SI01 実測図（1/40）



● サヌカイト 黒曜石 剥片

遺物は弥生土器甕、サヌカイト剥片を出土している。

SI35（Fig.10、Pla.22～24）

SI020南側で検出し、SI40を切る長方形の住居跡である。検出長軸約2.4m、短軸約2.1m、床面までの最大深さ約0.3m、掘り方深さ約0.33mを測る。遺物は弥生土器甕、サヌカイト剥片を出土している。

SI40（Fig.10、Pla.22～24）

SI35に切られる方形の住居跡である。東側は調査区外へ延びると考えられる。検出長軸約3.0m、床面までの最大深さ約0.43m、掘り方深さ約0.45mを測る。遺物は弥生土器甕、サヌカイト剥片を出土している。

SI30（Fig.11、Pla.24・25）

調査区南端で検出した円形と考えられる住居跡である。遺構西側は調査区外へ延びると考えられる。検出最大長約3.4m、硬化した床面は存在しない。掘り方深さ約0.4mを測る。住居内に土壙（S-17）とピット（S-16）が存在し、土壙は長軸約0.93m、短軸0.68m、深さ約0.12mを測る。遺物は覆土から弥生土器甕、壷、須恵器甕、サヌカイト石鏃、黒曜石剥片、土壙から弥生土器片、ピットから弥生土器甕を出土している。

溝

SD55（Fig.13、Pla.26～30）

調査区南側で検出した北東から南西に向かって流れ、JR線路を潜り抜けるためのレンガ構造物（暗渠）を備えた溝である。溝は検出長約7.5m、幅約2.2m、深さ約1.0mを測り、断面は両サイドにテラスをもつ逆台形状を呈する。レンガ構造物（暗渠）は上から見ると八の字状に構築されたと考えられ、現況は左の翼壁が損壊している。レンガの積み方は小口のみの段と長手のみの段を交互に積み上げるイギリス積みであり、アーチ部は幅約0.62m、高さ1.0mを測る逆U字状に形成される。迫持は三段の小口の縦積みで仕上げている。天端及び取水口、暗渠内はモルタルで覆っている。暗渠内は人為的に埋められた痕跡があり、遺物を伴っている。尚、暗渠内は人力で土の除去を行ったが、安全の確保から図示している範囲内で作業を終えている。

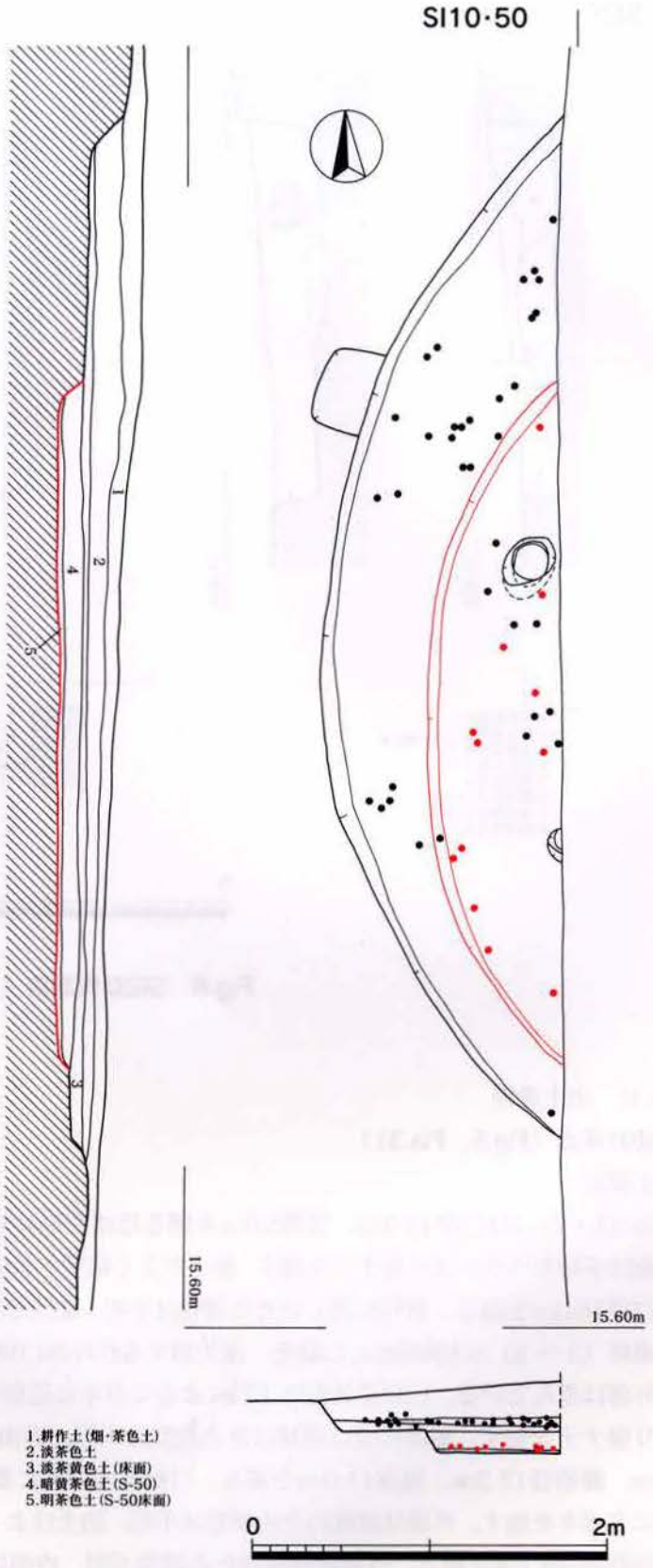


Fig.7　SI10・50 実測図（1/40）

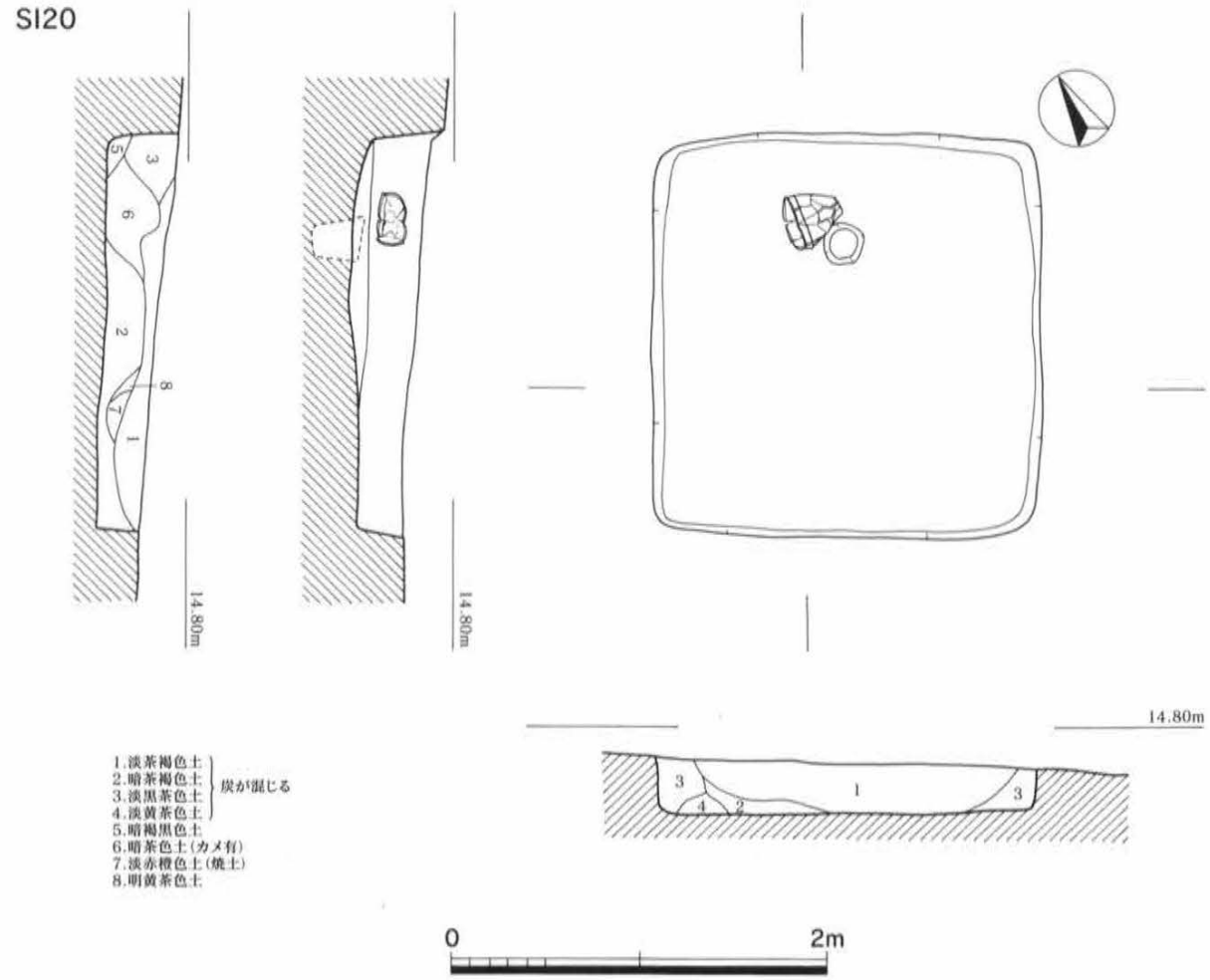


Fig.8　SI20 実測図（1/40）

（3）　出土遺物

SI01床面（Fig.5、Pla.31）

土師器

坏（1・2）1は口径14.3cm、器高5.0cmを測るほぼ完形の坏である。口縁部を内湾させ、体部と底部外面は手持ちヘラケズリ後ナデを施す。胎土がよく精選されており、淡橙茶色を呈する。2は底部を欠損し、口径16.0cmを測る。磨耗が著しいため調整は不明。胎土はよく精選されている。

高坏（3～5）3は脚端部と口縁を一部欠損するが坏部口径13.3cm、脚裾径9.75cm、器高9.75cmを測り、坏部は歪んでいる。口縁部外面は工具によるミガキに近似する調整を施し、体部外面は手持ちヘラケズリ後ナデを施す。脚部外面は磨耗のため調整は不明、内面は指頭痕と工具痕が残る。4は坏部口径13.4cm、脚裾径12.3cm、器高11.0cmを測る。口縁部内外面に横方向のミガキを施し、体部内面は不定方向にミガキを施す。外面は磨耗のため調整は不明。胎土はよく精選されている。5は脚部片で裾径12.0cm、残存器高6.7cmを測る。外面は磨耗のため調整不明、内面は不定方向のナデと指頭痕が残る。裾端部はヨコナデ。

土製品

支脚（6）粘土で固められた支脚と考えられる。上部に精選された粘土を用い、下部は粗い粘土で仕上げる。淡橙茶色を呈しており、かなり脆い。

SI01（Fig.15～17、Pla.31・32）

土師器

坏（7～9）7は口径13.4cm、器高4.6cmを測る。口縁部を内湾させ丸みを持たせている。磨耗のため調

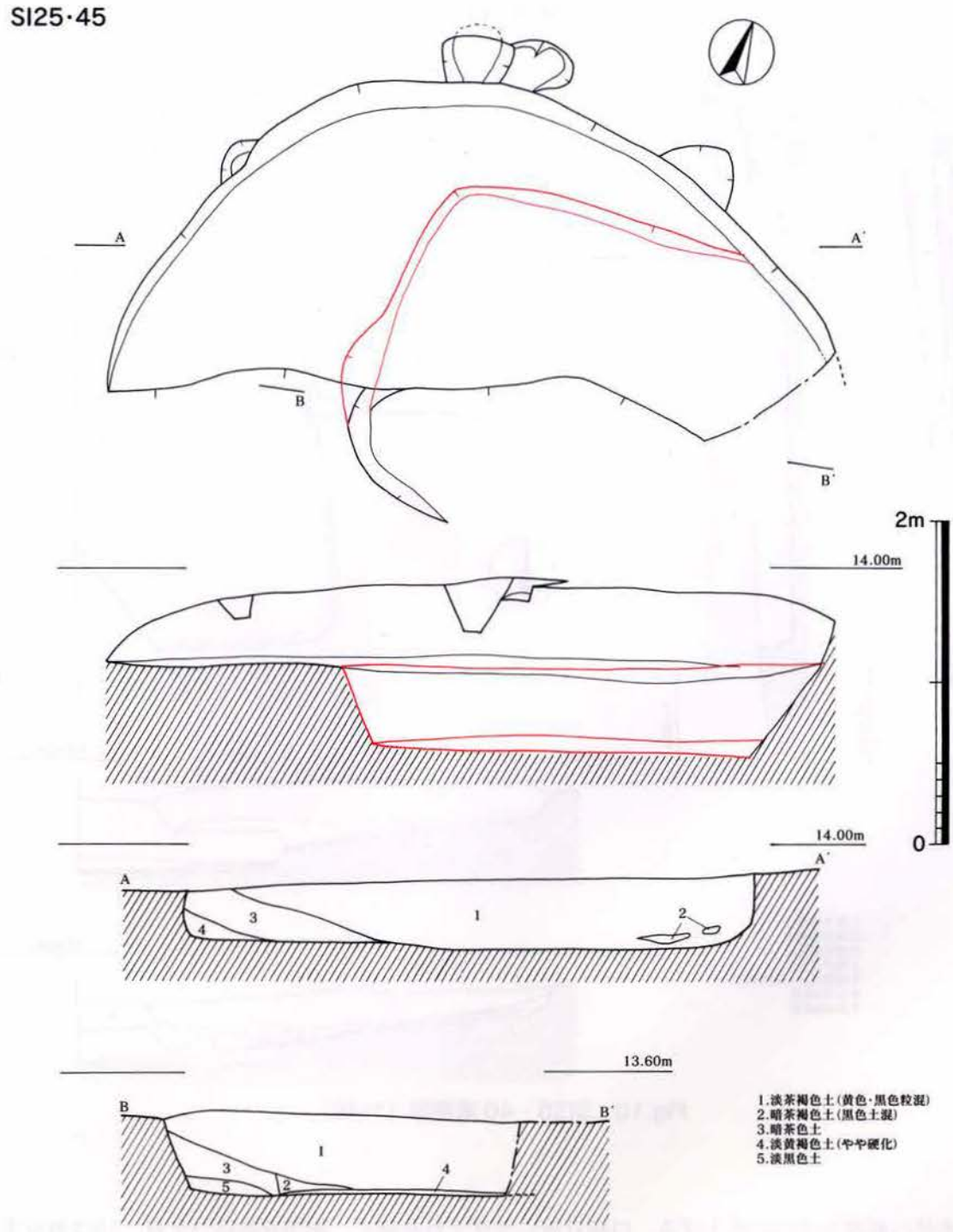


Fig.9　SI25・45 実測図（1/40）

整は不明であるが、底部内面にナデの痕跡が若干残る。8は口縁部片で内湾させる。磨耗のため調整は不明。胎土がよく精選されている。9は口縁部片で若干内湾させる。内面に横方向のミガキを施す。外面は磨耗のため調整は不明。胎土がよく精選されている。

高坏（10）坏部口径13.9㎝、脚裾径8.9㎝、器高10.4㎝を測る。口縁部をヨコナデ、体部外面を手持ちヘラケズリ後ナデ、内面を不定方向のナデで仕上げる。脚部は外面は磨耗のため不明、内面は工具痕と指頭痕が残る。胎土がよく精選されている。

弥生土器

甕（11～19・23）全て口縁部片である。11・12は頸部をやや屈曲させ口唇部にキザミ目を施す。頸部下に断面三角形の突帯を貼り付ける。13は口縁部を貼り付け外側に屈曲させキザミ目を施す。14は

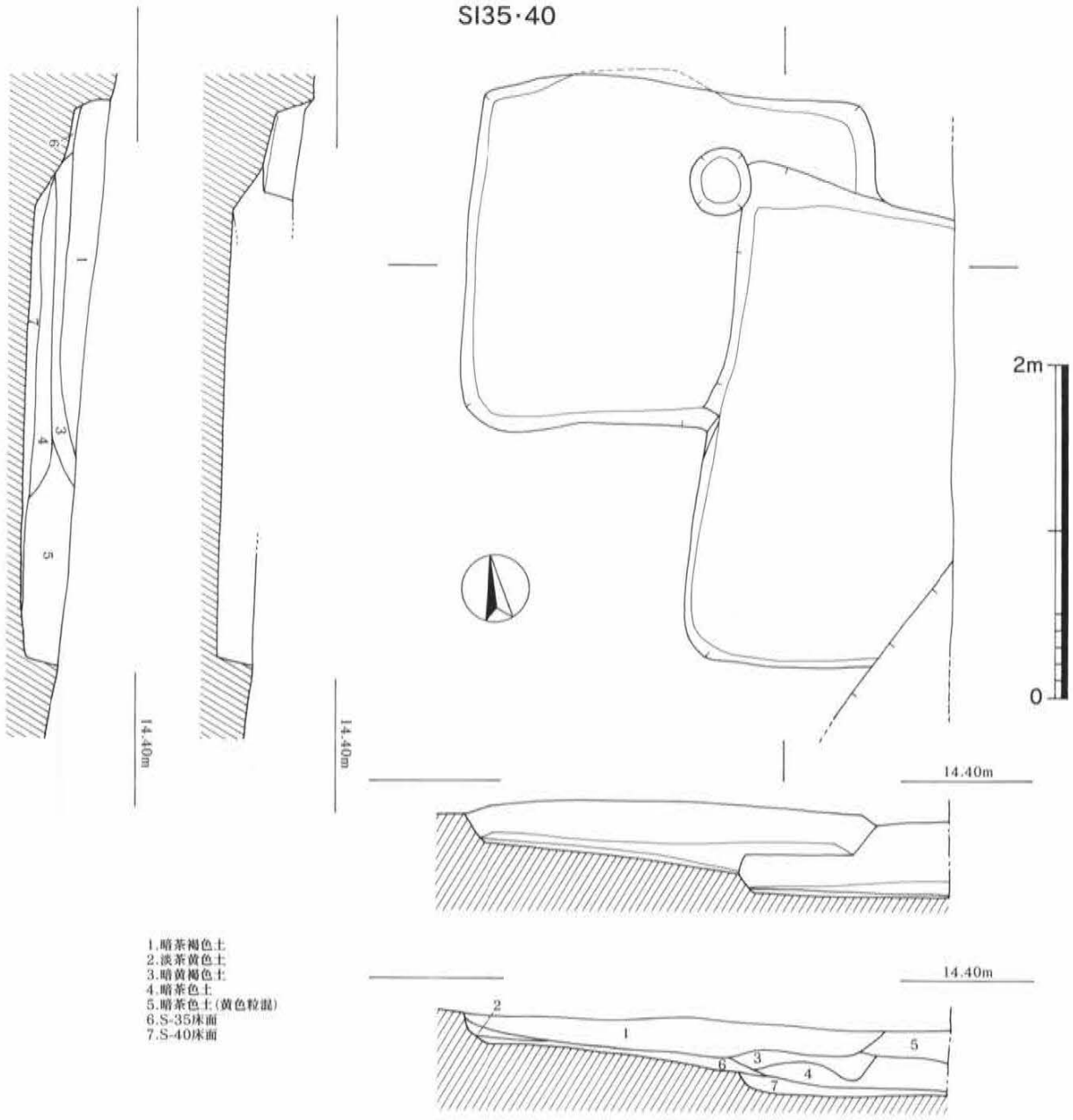


Fig.10　SI35・40 実測図（1/40）

内湾させ口唇部を平らに仕上げる。口縁外面にキザミ目を施す。体部外面はハケ目。15は外反する口縁部片で口唇部に細かい円形のキザミ目を施し頸部には指頭痕が残る。16はやや強く口縁が屈曲し、キザミ目を施す。頸部下には横方向のミガキを施す。17は14と同様に口縁部を貼り付け外面にキザミ目を施す。18は口縁部をやや外に摘み出し円形の細かいキザミ目を施す。19は口縁を屈曲させ、調整は磨耗が著しいため不明。23は底部片で底径10.9cmを測る。内外面は不定方向のナデ。

土師器

甕（20～21）20は口径18.0cmを測る。外面は斜方向のハケ目、内面は不定方向にケズリを施す。焼成良好で淡橙茶色を呈する。21は口縁部片で内面に横方向のケズリを施す。

甑（22）ほぼ完形であり、口径27.2cm、器高25.8cm、裾部径7.05cmを測る。胴部中位に把手を貼り付け外面は縦方向に近いハケ目、内面は不定方向にケズリを施す。裾部がやや歪んでいる。

ミニュチュア土器（24）口径4.0cm、器高2.5cmを測る。手ずくねで内面に指頭痕が残る。

石製品

臼玉（25～42）計18個確認している。滑石製で幅0.5cm、厚さ0.25cm、重さ約0.1ｇである。

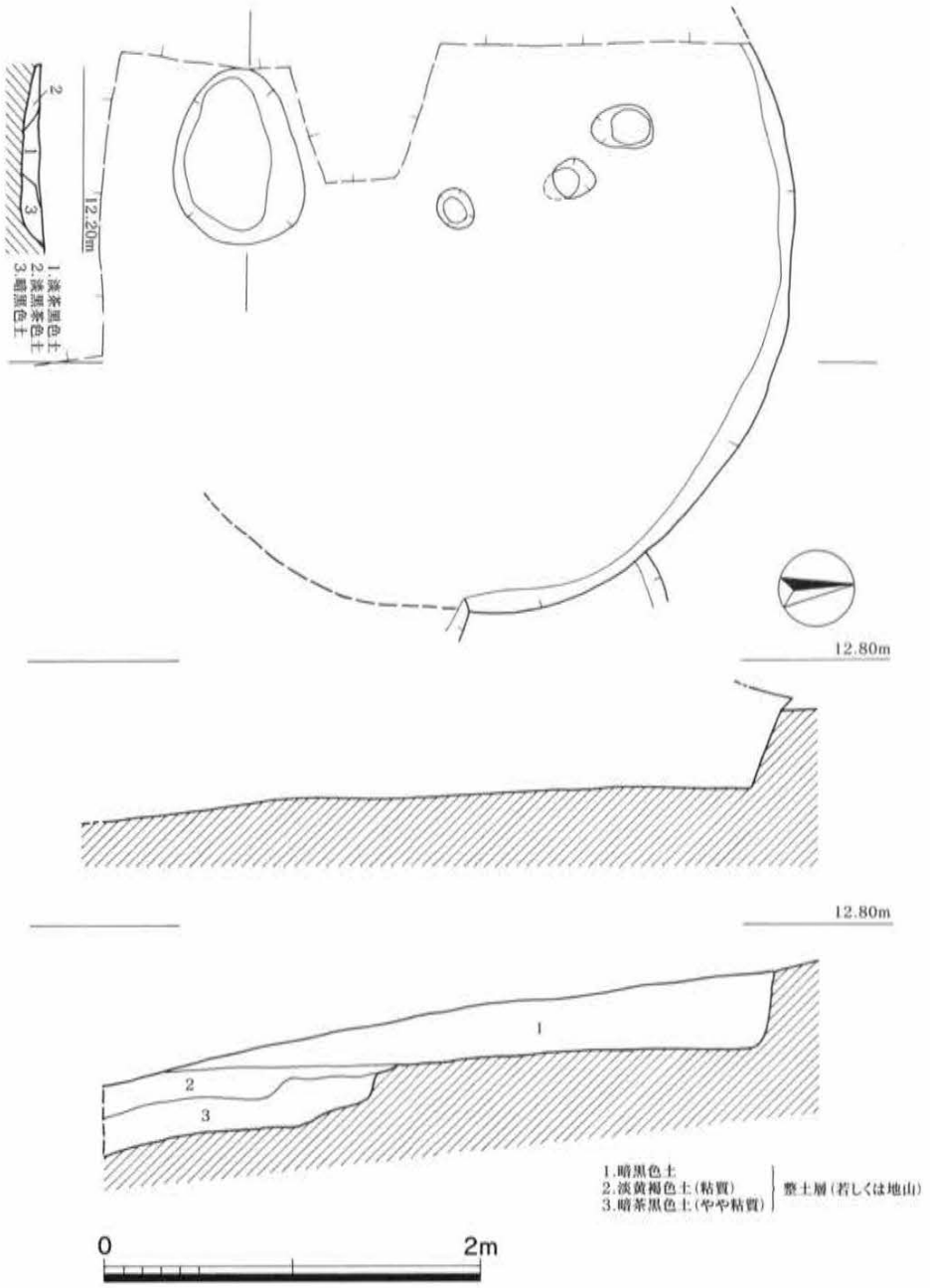


Fig.11　SI30 実測図（1/40）

石鏃（43）サヌカイト製の石鏃である。先端を欠損する。厚さ0.3cm、重さ1.2ｇを測る。

剥片（44）使用した感のある剥片である。長さ4.6cm、厚さ1.7cm、重さ22.2ｇを測る。

SI10（Fig.18、Pla.32）

弥生土器

甕（45・46）45は直に立つ口縁を呈し、口縁下に断面三角形の突帯を貼り付け小さいキザミ目を施す。46は外反する口縁部片で口唇部小さなキザミ目を施す。

石製品

石鏃（47）サヌカイト製の石鏃である。完形で長さ2.5cm、厚さ0.5cm、重さ2.3ｇを測る。

SI20（Fig.18、Pla.32）

弥生土器

甕（48～50）48は完形の甕であり、口径24.2cm、器高27.3cm、底径7.2cmを測る。口縁部下に断面三角形の突帯を貼り付け、口縁部と突帯にキザミ目を施す。調整は外面は斜方向と縦方向のハケ目、内面はナデである。底部外面にミガキを施す。

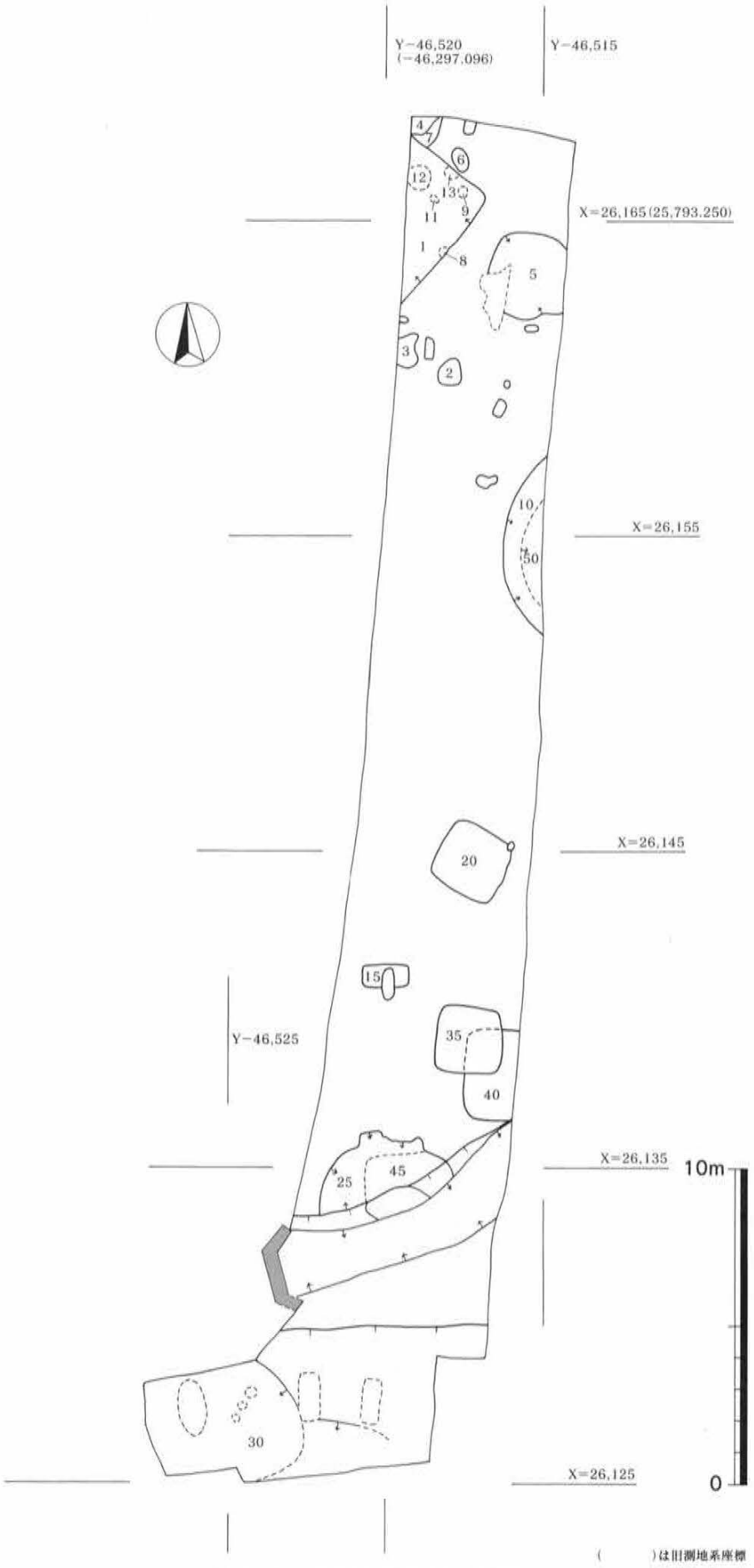


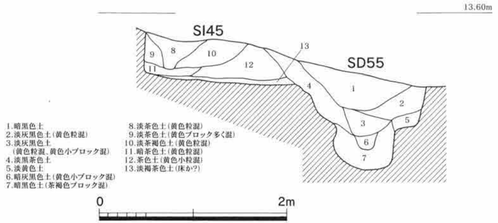
Fig.12 遺構略測図（1/200）

蔵敷立野遺跡レンガ水路展開図（A・C・D・F面）1:20

DL=14.0
DL=13.5
DL=13.0
DL=12.5
DL=12.0

写測エンジニアリング株式会社

Fig.13　レンガ構造物（暗渠）実測図①(1/20)



レンガ水路土層図②(1/40)

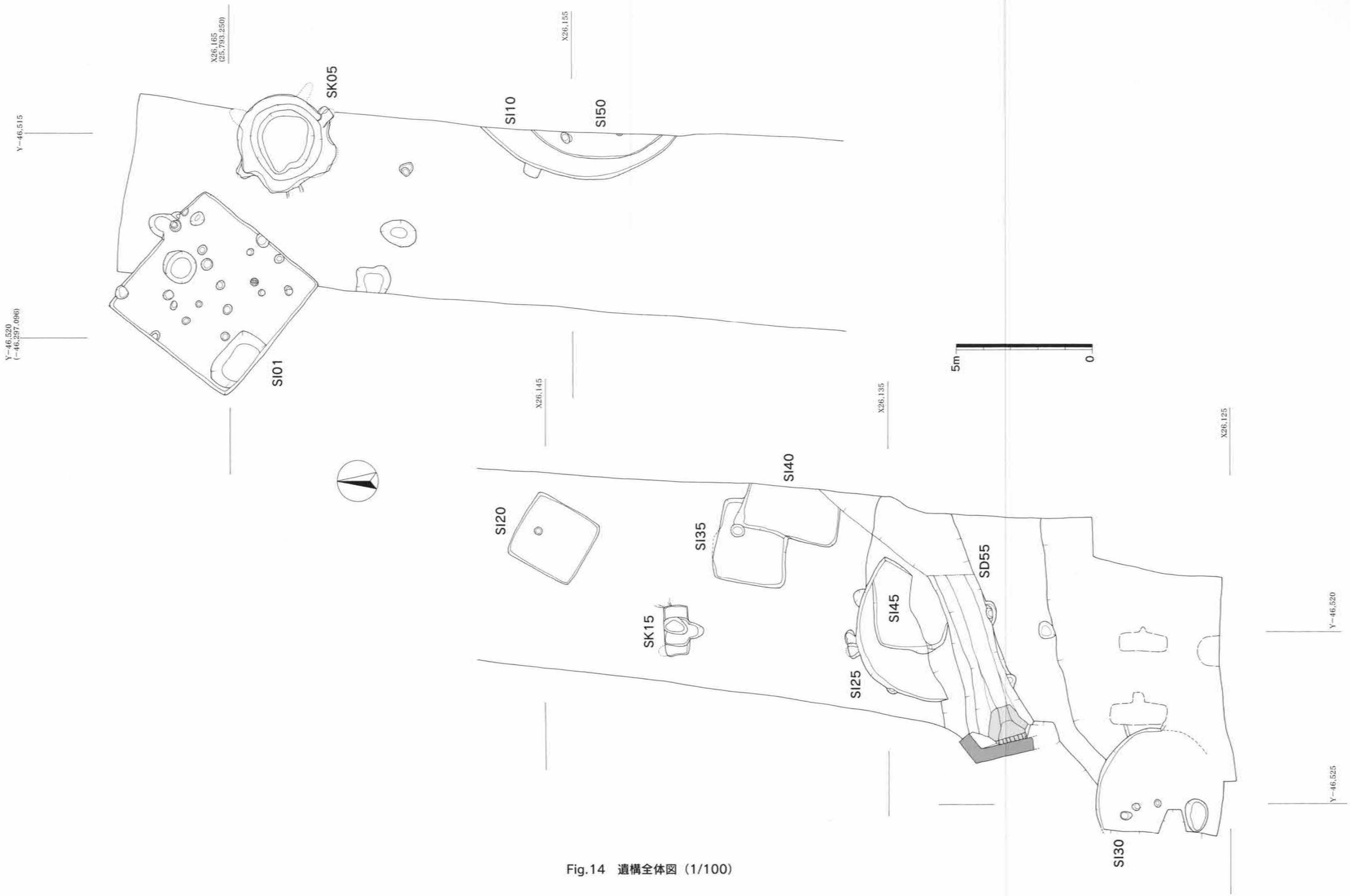


Fig.14　遺構全体図（1/100）

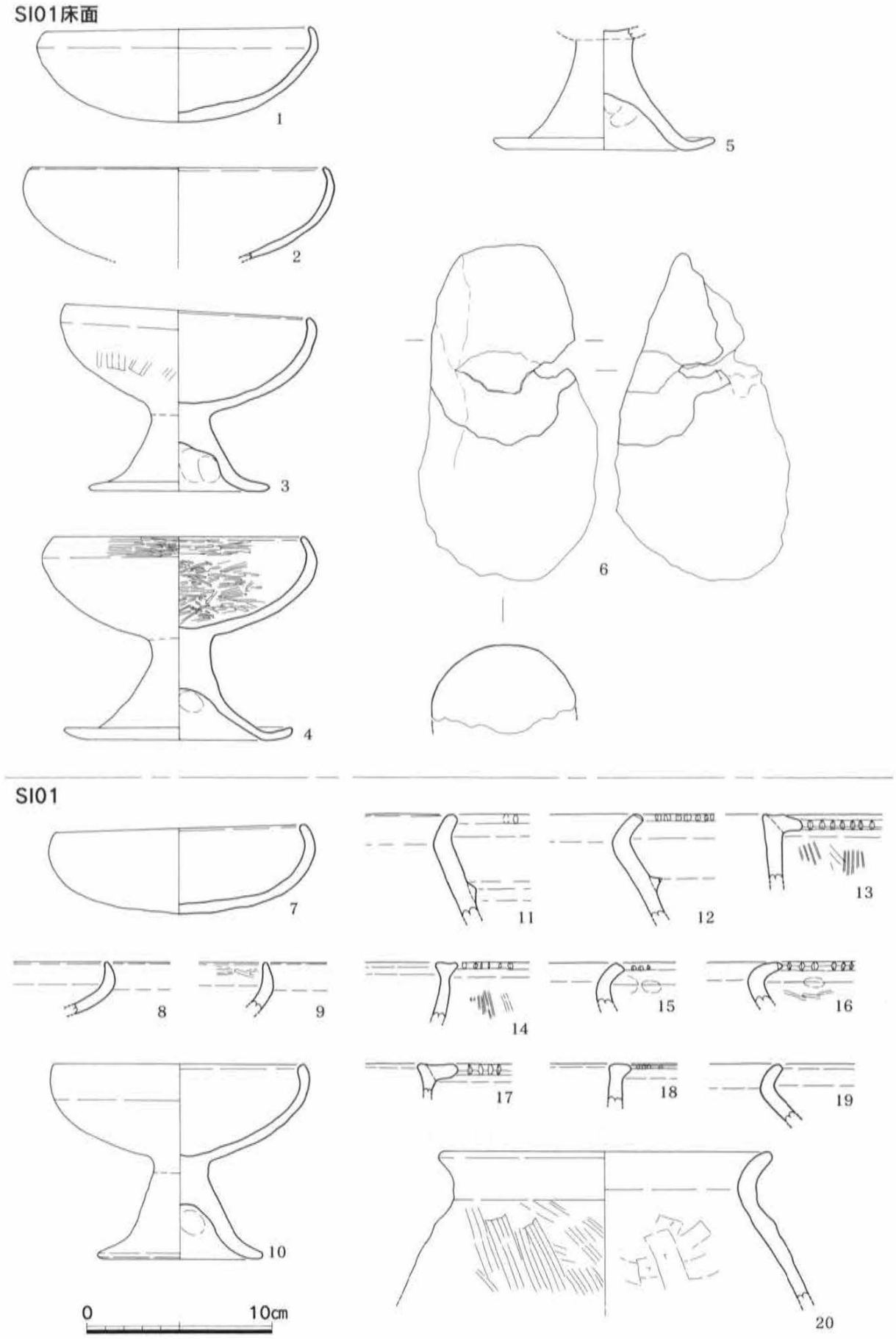


Fig.15　SI01 出土遺物①(1/3)

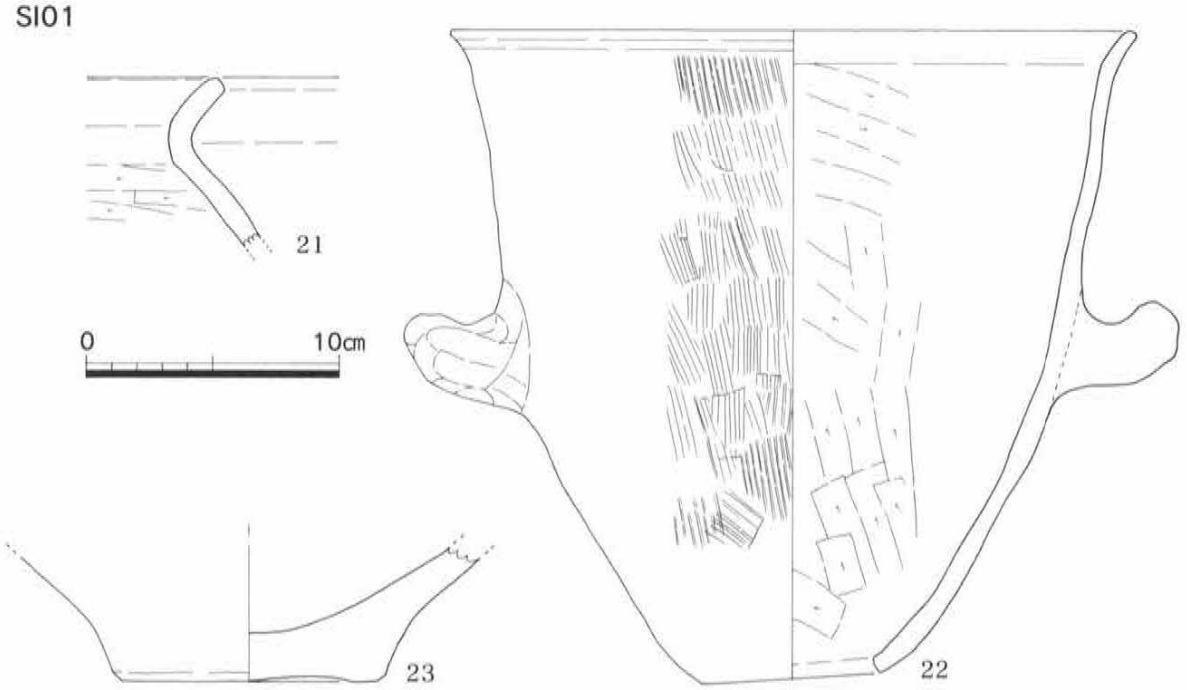


Fig.16　SI01 出土遺物②(1/3)

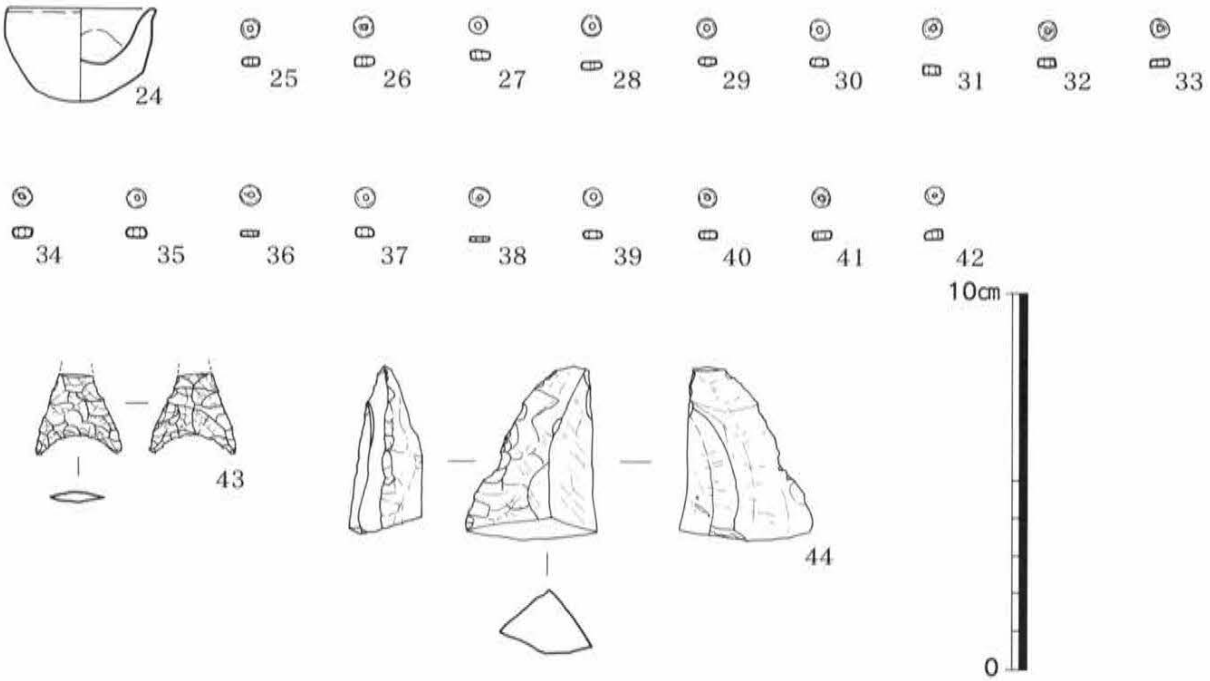


Fig.17　SI01 出土遺物③(1/2)

49は口縁部片で断面三角に近い口縁を形成しキザミ目を施す。50はやや外反する口縁部片で口唇部にキザミ目を施す。

SI35（Fig.18、Pla.0）

弥生土器

甕（51 ～ 58）51は口径19.8cmを測る。断面三角形に近い口縁を貼り付け、円形に近いキザミ目を施す。調整はナデ。52・53は51と同様のタイプである。54は口縁部片で口唇部にキザミ目を施す。55は大型の甕の口縁部で口唇部に2ヶ所のキザミ目を施し、調整はナデ。56は口縁が直に外反するタイプで調整はナデ。57は底径6.4cmを測り、底上げの底部を形成し調整はナデ、内面には指頭痕が残る。58は底径5.5cmを測り底上げの底部を形成し調整はナデである。

SI25（Fig.18、Pla.32・33）

弥生土器

甕（59～64）59は崩れた口縁端部であり、口縁下に断面台形の突帯を貼り付ける。口縁部及び突帯にはキザミ目を施す。60は口縁を断面三角形に近い形をとり、調整はナデ。61は口縁に断面三角形に近い形をとり、口唇部にキザミ目を施す。62は断面台形の口縁を形成し口唇部にキザミ目、内面に指頭痕が残る。63は断面三角形の口縁を形成し口縁部には形成時の指頭痕が残る。64は口縁部が一部欠損するが断面三角形の口縁を呈する。65は底径6.4cmを測り底上げの底部を形成し調整はナデ、内面には指頭痕が残る。

石製品

石鏃（66）サヌカイト製の石鏃で先端が欠損する。抉りが浅く、厚さ0.5cmを測り、重さ0.9ｇである。

SI45（Fig.18、Pla.33）

弥生土器

甕（67）断面台形に近い口縁を形成し口唇部にキザミ目を施す。口縁下に突帯を貼り付ける。

SI30（Fig.19、Pla.34・35）

弥生土器

甕(68～76)68は口縁に丸みのある断面三角形の口縁を形成し、口縁下に断面三角形の突帯を貼り付け、共にキザミ目を施す。69は断面三角形の口縁を形成し内側を若干摘み上げた形状をとる。口縁下に断面三角形の突帯を貼り付け、キザミ目を施す。口唇部下に爪状の痕跡が残り、突帯下は縦方向のハケ目を施す。内面には指頭痕が残る。70は垂れ下がる断面三角形の口縁を呈し、口唇部にキザミ目、調整はナデ。71は外反する口縁部片で調整はナデ。72はくの字に屈曲する口縁を呈し、調整はナデ、内面は横方向のナデを施す。73は底径6.0cmを測り、底部に焼成後と考えられる穿孔が残る。74は底径7.65cmを測り、外面は縦方向のハケ目下に工具痕が残る。75は平底で底径6.8cmを測り、外面に縦方向のハケ目、内面はナデ痕跡が残る。76は底径5.1cmを測り、底部が柱状に立ち上がり体部が開くタイプである。外面に縦方向の工具痕が残る。

石製品

石鏃（77～79）77はサヌカイト製の完形品である。厚さ0.3cm、重さ1.3ｇを測る。78はサヌカイト製で先端が欠損する。厚さ0.3cm、重さ0.6ｇを測る。79はサヌカイト製で脚が一部欠損する。厚さ0.4cm、重さ0.9ｇを測る。

石錐（80）長さ3.7cm、厚さ0.5cm、重さ5.9ｇのサヌカイト製である。

SK05（Fig.19、Pla.35）

弥生土器

甕（81）平底で底径7.6cmを測る。磨耗が著しく調整は不明。

石製品

石鏃（82～84）82はサヌカイト製で脚部が一部欠損する。抉りが浅く、厚さ0.4cm、重さ1.5ｇを測る。83はサヌカイト製で厚さ0.45cm、重さ1.4ｇを測る。84はサヌカイト製で先端及び脚の一部を欠損する。厚さ0.4cm、重さ1.0ｇを測る。

SK15（Fig.19）

石製品

磨石（85）安山岩製で全面に使用痕跡が見られる。重さ91.3ｇ。

S-16 【SI30内ピット】（Fig.19、Pla.35）

弥生土器

甕（86）口縁部を断面三角形に形成し口縁下に断面三角形の突帯を貼り付ける。共にキザミ目を施す。

S-17 【SI30内ピット】（Fig.19、Pla.35）

土製品

投弾（87・88）87は長さ3.8cm、重さ13.8ｇ、88は長さ4.1cm、重さ14.2ｇを測る。

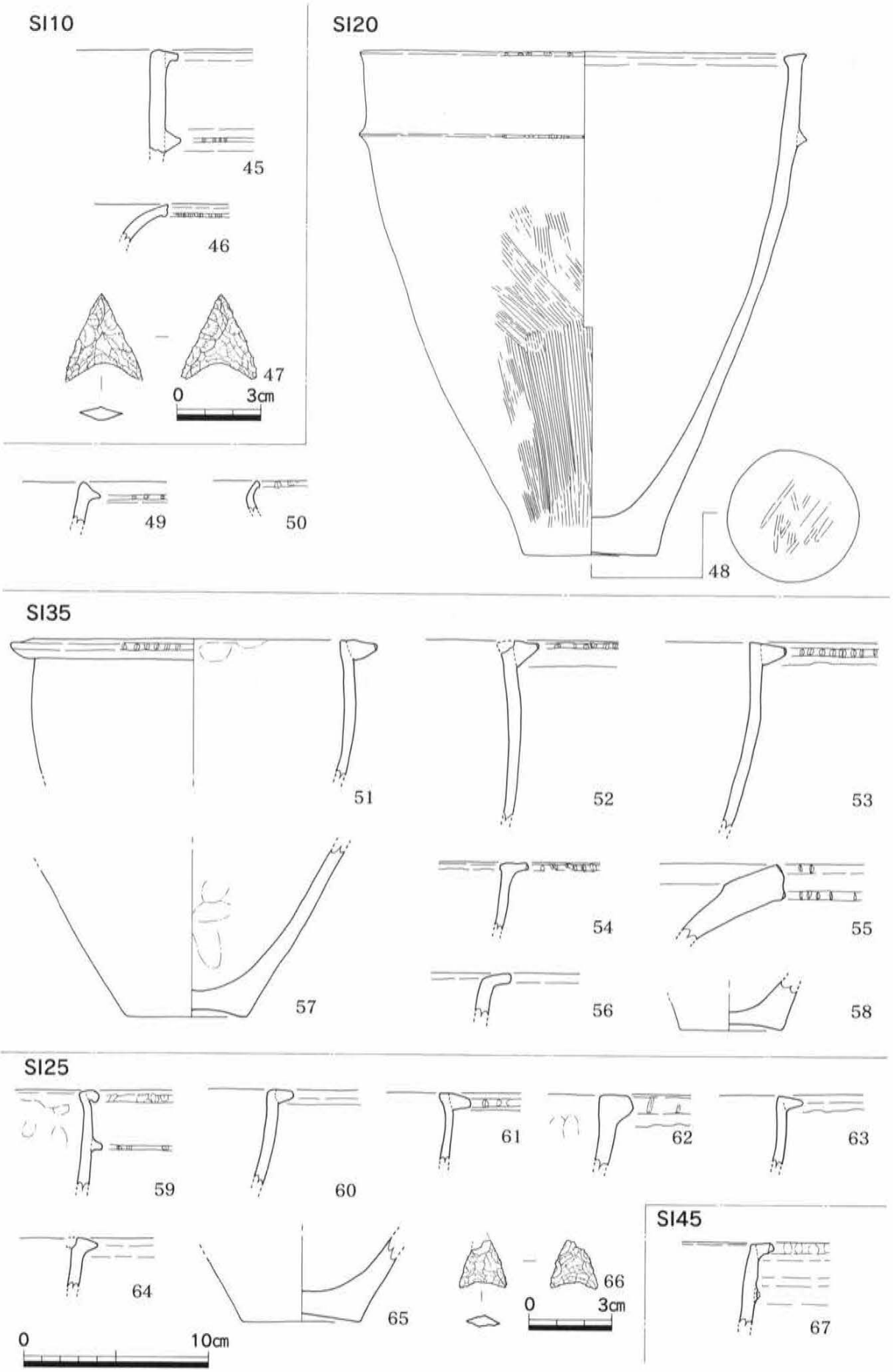


Fig.18　SI10・20・35・25・45 出土遺物（石 1/2・土器 1/3）

石鏃（89）サヌカイト製の石鏃で尖端と脚を一部欠損する。厚さ0.35㎝、重さ1.4ｇを測る。

S-13 【SI01内ピット】(Fig.19)

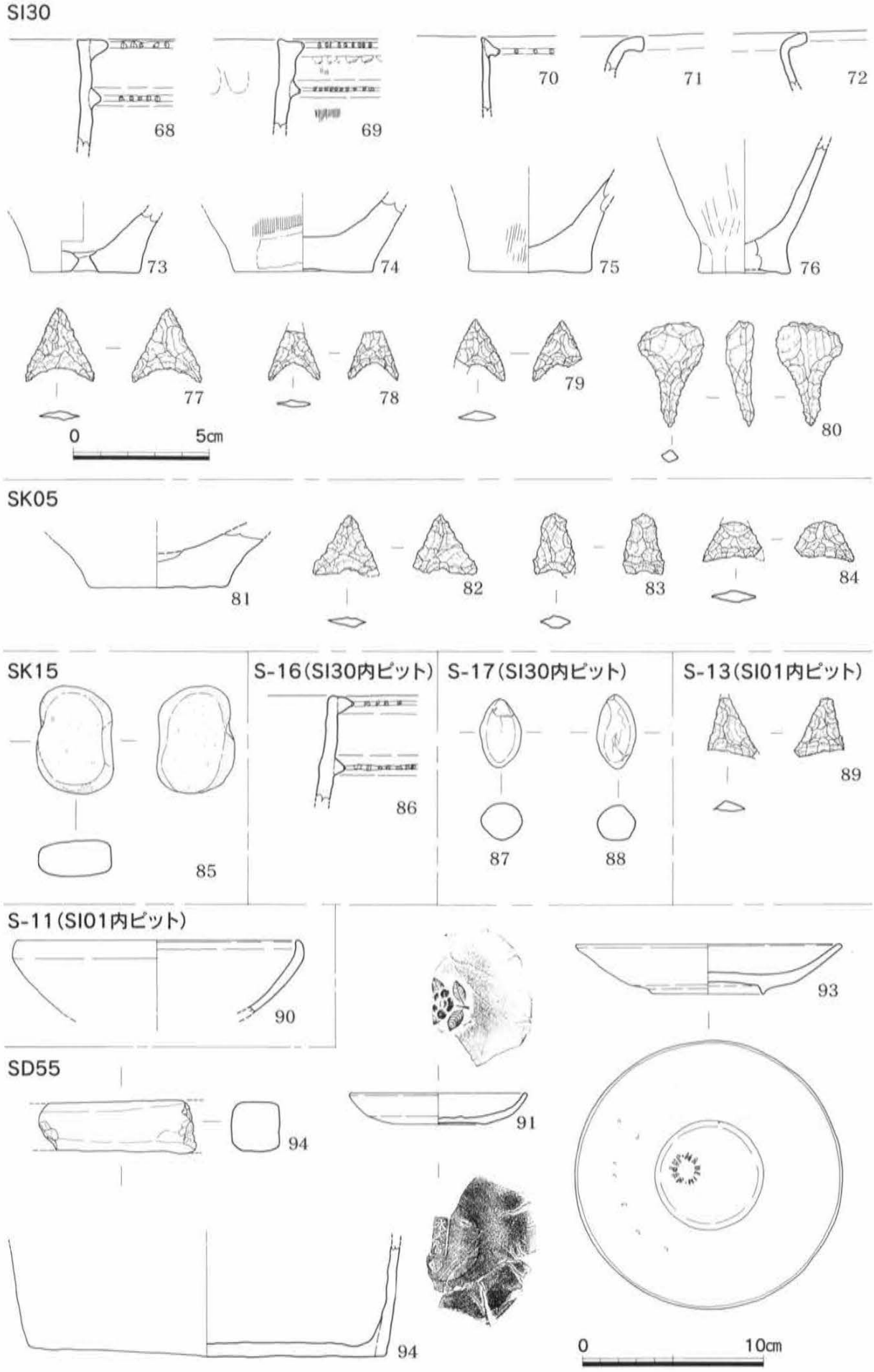


Fig.19　SI30・SK05・15・他出土遺物（石器 1/2・土器 1/3）

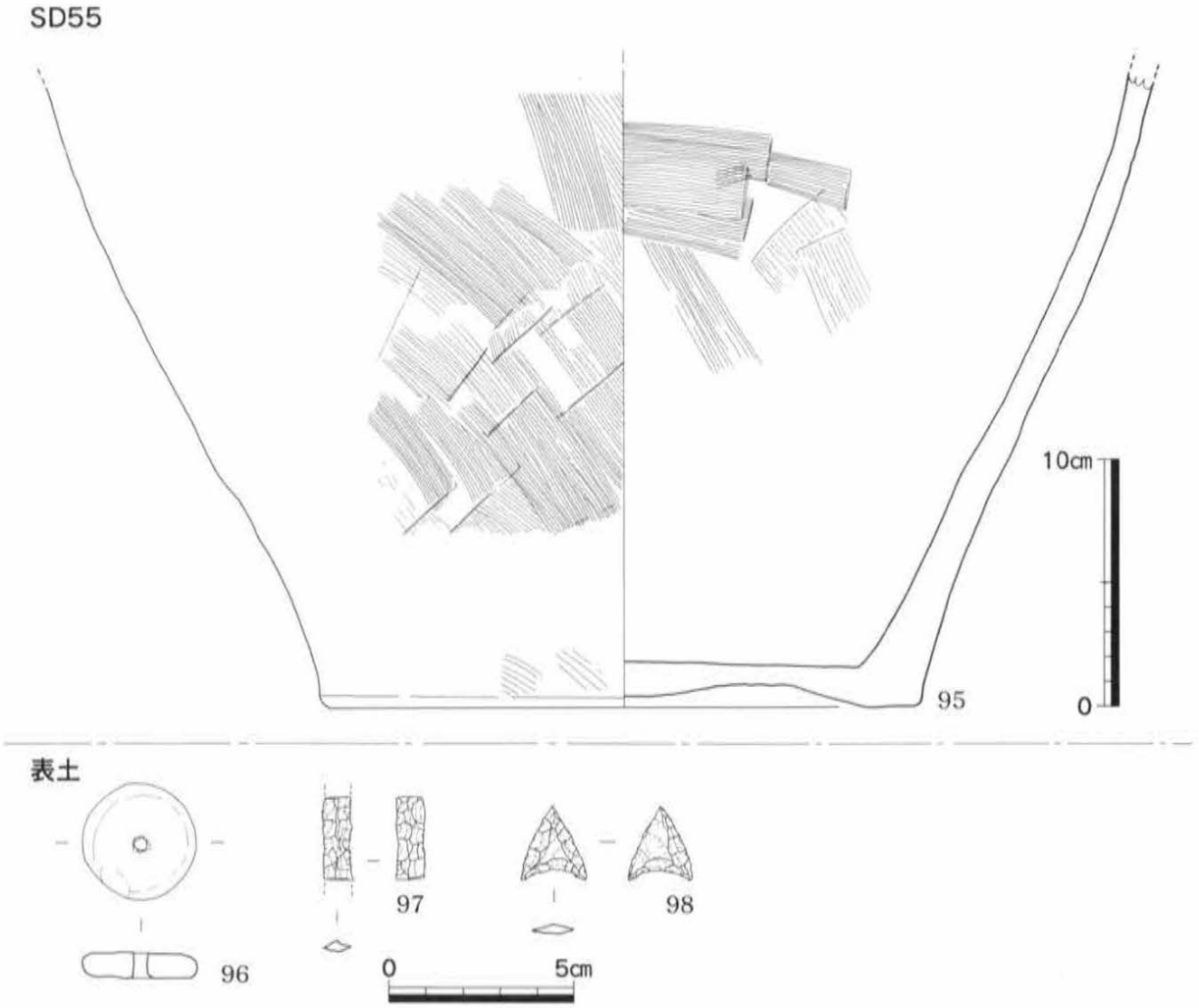


Fig.20　レンガ水路・表土出土遺物（石器 1/2・土器 1/3）

土師器

坏×高坏（90）口径15.5cmを測り底部が欠損する。口縁端部を内側に摘み上げ内湾させる。

SD55（Fig.20、Pla.35）

土師器

小皿（91）口径9.9cm、器高1.7cm、底径4.9cmを測る。見込みに梅花文の型押し、底部外面に「水天宮」と屋号であろう「博多□□□」のスタンプが残る。

火鉢（92）底部片で底径19.6cmを測る。内面は工具痕跡が残り、外面は磨耗が著しいため不明。

甕（95）底径24.3cmを測る。内外面は斜方向にハケ目を施し、底部内面はナデ、底部外面ハケ目。

白磁

皿（93）口径14.7cm、器高2.75cm、高台径6.0cmを測る。高台のみ露胎で見込みに重ね焼きのための釉の掻き取り痕が残る。底部外面に時計回りに .MADEIN. と反時計回りに JAPAN のスタンプが残る。

土製品

棒状土製品（94）両端が欠損している。断面四角形に形成され、厚さ2.7cmを測る。

表土（Fig.20、Pla.35）

土製品

紡錘車（96）完形品で直径4.65cm、厚さ1.05cm、重さ26.3ｇを測る。中央に穿孔径0.5cmを測る。

石製品

細石刃（97）両端が欠損しているが、刃部の形成痕は残る。幅0.75cm、厚さ0.3cm、重さ0.5ｇを測る。

石鏃（98）サヌカイト製の石鏃で抉りは浅い。厚さ0.3cm、重さ0.7ｇを測る。

Ⅳ．考察

竪穴住居について

今次調査から計9棟の住居跡を検出している。こられらの住居跡からは弥生時代前期末から古墳時代中期までの土器を出土しており、ある程度の時期幅で集落の変遷があると考えられる。また、住居構造や規模にも違いが見られ、当市域での類例や時期・土器の様相について述べる。

弥生時代前期末から中期初頭にかけての遺物をもつ住居はSI10（円形）・20（方形）・35（方形）・25（円形）・45（円形）・30（円形）であり、SI01以外全ての住居となる（SI40・50は判断しうる遺物が出土していない）。これらの住居出土遺物を概観すると、甕の形態による分類が見られる。SI10・20・45は亀ノ甲タイプと呼ばれる刻み目突帯文系の土器と如意口縁をとる板付Ⅱ式系の土器が混在する（以下、A期）。次に亀ノ甲タイプが大半を占め、城ノ越式と考えられる甕が少数出土するSI25・30・35である（以下、B期）。住居形態からするとA・B期共に円形と方形の住居が混在している。しかし、方形の住居に関しては円形に比べて小さく、弥生後期の方形住居に比べても非常に小さい。狭小な調査区のため住居配置等の全容は覗えないが、A期においてSI25傍にSI35（40）、B期においてSI10傍にSI20という円形住居の傍に小型方形住居が伴っている点は指摘しておく。

古墳時代の住居はSI01のみである。住居は4本柱でほぼ正方形である。竈ないしは炉と考えられる痕跡を残している。遺物は土師器高坏、滑石製臼玉等を出土しており、遺物の時期については5世紀後半から6世紀代と考えられる。

これらの住居跡について、当市域での調査事例との関係から見てみると、弥生時代前期末から中期初頭にかけての遺跡は市南部の常用遺跡群がある。標高約7m程の扇状地性低地に立地し、南に矢部川が展開する位置関係にある。遺跡からは住居跡、土壙、墓等の遺構、板付式土器から須玖式土器までの遺物が大量に出土しており、市域における当該期の指標となる遺跡群である。出土遺物に関しては、今次調査出土遺物である亀ノ甲タイプと呼ばれる刻み目突帯文系土器や城ノ越式土器を多量に出土しており、当遺跡における前期末の遺物出土傾向は常用遺跡群と同様である。現在までに前期末から中期初頭にかけての遺跡は市南部でしか確認されなかったが、今次調査により市北部にも当該期の遺跡が存在することが明らかになり、今次調査から西へ約600mの八女丘陵裾部に存在する弥生中期以降の大集落を形成する蔵数森ノ木遺跡との関連も指摘しなければならない。古墳時代の住居であるSI01出土遺物と類似する遺跡は蔵数森ノ木遺跡、田佛遺跡である。共に今次調査近隣の八女丘陵裾部に展開する遺跡である。時期を判断する遺物については高坏が挙げられる。5世紀前半までに見られる屈曲しながらラッパ型に開くタイプではなく、体部から口縁にかけて内湾させる坏部をもち、短脚であるという特徴をもつ。この高坏を出土する遺構は当市では比較的少ない。土器の時期についても5世紀後半以降で6世紀のどの段階まで残るのかは不明である。また、遺構には竈であるのか炉であるのか判断しにくい痕跡が残り、須恵器の出土が皆無であることから、5世紀代には住居は廃絶しているのではないかと考える。

レンガ構造物（暗渠）について

今次調査区と並行するJR線路に直交する形でSD55の溝を検出している。溝の西端、線路直前にレンガの構造物を設け、暗渠として線路西側へ抜ける構造をもつ遺構である。

JR鹿児島本線にはレンガ橋を含め、数多くのレンガ構造物が残存している。当市では津島地区や羽犬塚地区等でレンガ橋が数ヶ所で見られ、一部は現役で使用されている。

JR鹿児島本線は1883年（明治16年）に民営の九州鉄道（株）として鉄道建設申請が行われ、1888年に博多ー久留米間で着工し、当市域は1891年（明治24年）に門司ー高瀬間延伸により敷設されている。その後、1907年に逓信省帝国鉄道庁により買収、国有化され更に1987年に旅客鉄道会社として民営化された歴史をもつ。

羽犬塚駅付近の鉄道工事については、津島地区の矢部川鉄橋工事に岡山県出身の山下里吉が派遣され、

近隣農家から現場作業に雇用される者が多かったといわれている。

レンガは江戸時代末期の1857年（安政4年）に長崎でオランダ人海軍将校により指導、製造されたのが初現とされ、その後、全国各地にレンガ製造所が建設され大量生産されるようになり、官営工場建設などでの需要が高まり、後に鉄道建設に本格的に使用されることとなる。

鉄道線路工事と平行して駅舎や水門、橋梁、倉庫などはレンガにより構築され、ドイツ人技師やイギリス人技師による近代化が推し進められた。また、同時に木材や石、コンクリートなどもレンガと同様に多く使用されている。

今次調査で確認されたレンガ構造物は本文で述べたとおり、取水口としてアーチをつくり両サイドに翼壁を設け、天井部や取水口下はモルタルで覆っている。レンガの積み方はイギリス積みである。当時はイギリス積み、フランス積み、長手積み、小口積み等があるが、イギリス積みが標準で一般的な積み方とされ、フランス積み等はイギリス積みより早く採用され、美観に優れていたが、積み方が煩雑なため、ごく一部の採用に留まっている。当市のレンガ構造物の中では矢部川に残存する橋脚に一部フランス積みが確認されている。

レンガ寸法は1925年（大正14年）に全国統一規格（210㎜×100㎜×60㎜）が定められ、それ以前は製造所や用途別、仕様によりに寸法が異なり、寸法による生産地比定ができる研究が小野田滋氏によりなされている。また、 今次調査で確認されたレンガを測定してみたところ、長さ230㎜～ 235㎜（平均232.5㎜）、幅105 ～ 120㎜（112.5㎜）、厚さ55㎜～ 65㎜（60㎜）を測る。これを小野田滋氏の分類で見るとⅣ -1類に近似する。この寸法のレンガは関西地方以東に多く見られ、九州では熊本に若干見られるが少数派のようである。また、Ⅳ類が全体シェア（データ総数1526）の9％にしか該当せず、年代別で見ると1872年～ 1881年の間が最も生産及び使用されたようである。

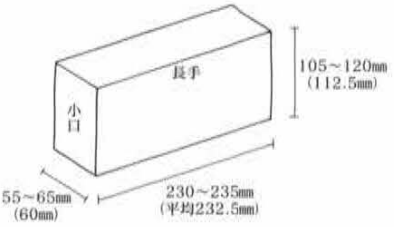


Fig.21　検出したレンガ寸法

今回確認されたレンガ構造物の築造年代については、博多一久留米間の鉄道開通が1889年（明治22年）であり、続いて工事された久留米から木葉にかけての路線が1891年（明治24年）には開通していることから、1889年から1891年の2年の間になる。市史では1889年以降引き続き久留米以南の工事が進められたとあるので、1889年に近い時期に構築されたと考えられる。

西洋文明が否応なく入ってきた明治時代、外国人により指導され日本で鉄道が敷設された時期に今次調査のレンガ構造物が構築された。それから120年後、日本人が生み出した高速鉄道である新幹線を九州に建設するために、コンクリート製橋脚建設のあおりを受け近代化遺産であるレンガ構造物が破壊・消滅したことは何とも皮肉な出来事である。市内にはまだ幾つかのレンガ構造物をはじめとする近代化遺産が残っている。今後、これらの保護・活用を推し進めていかなければならない。

参考文献

小野田滋『鉄道構造物探見』トンネル、橋梁の見方・調べ方　JTB キャンブックス 2002

小野田滋　景観学研究叢書『鉄道と煉瓦』その歴史とデザイン　鹿島出版会　2004

『筑後市史』筑後市1995

『福岡県の近代化遺産』- 日本近代化遺産総合調査報告書 -　福岡県文化財調査報告書　第113集　福岡県教育委員会1993

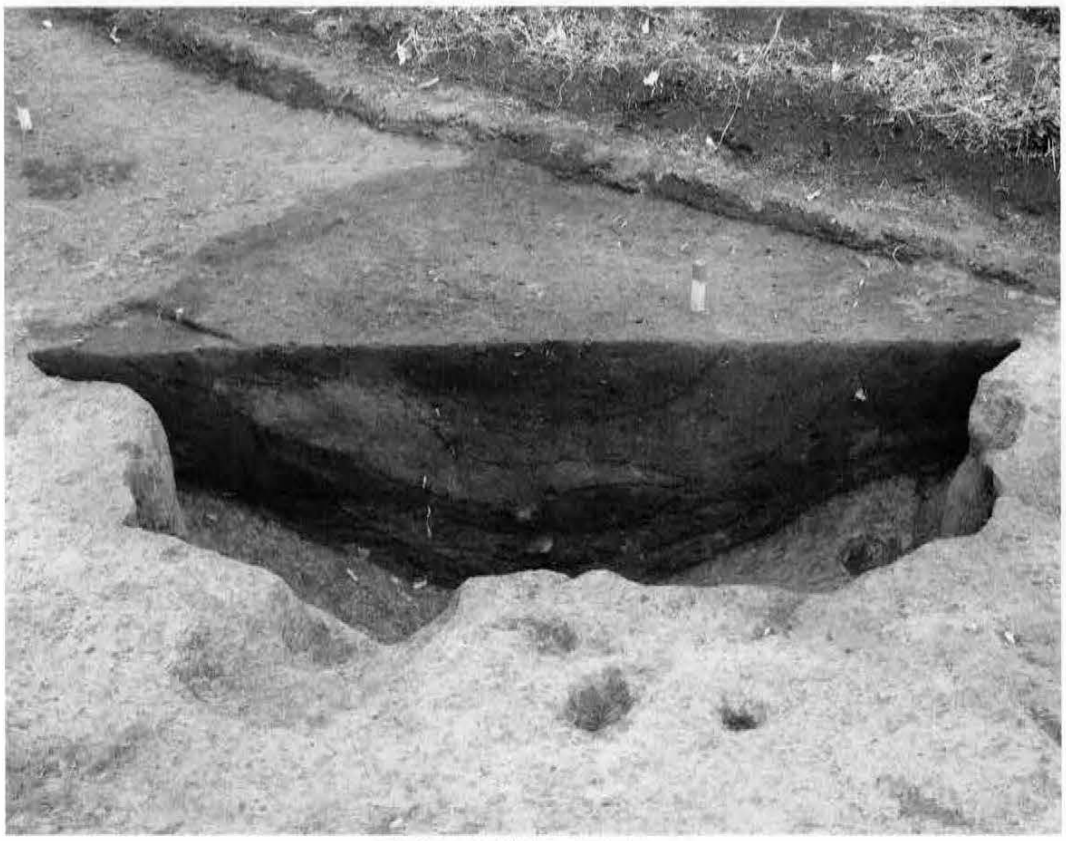
PLATE

調査区全景（北から）

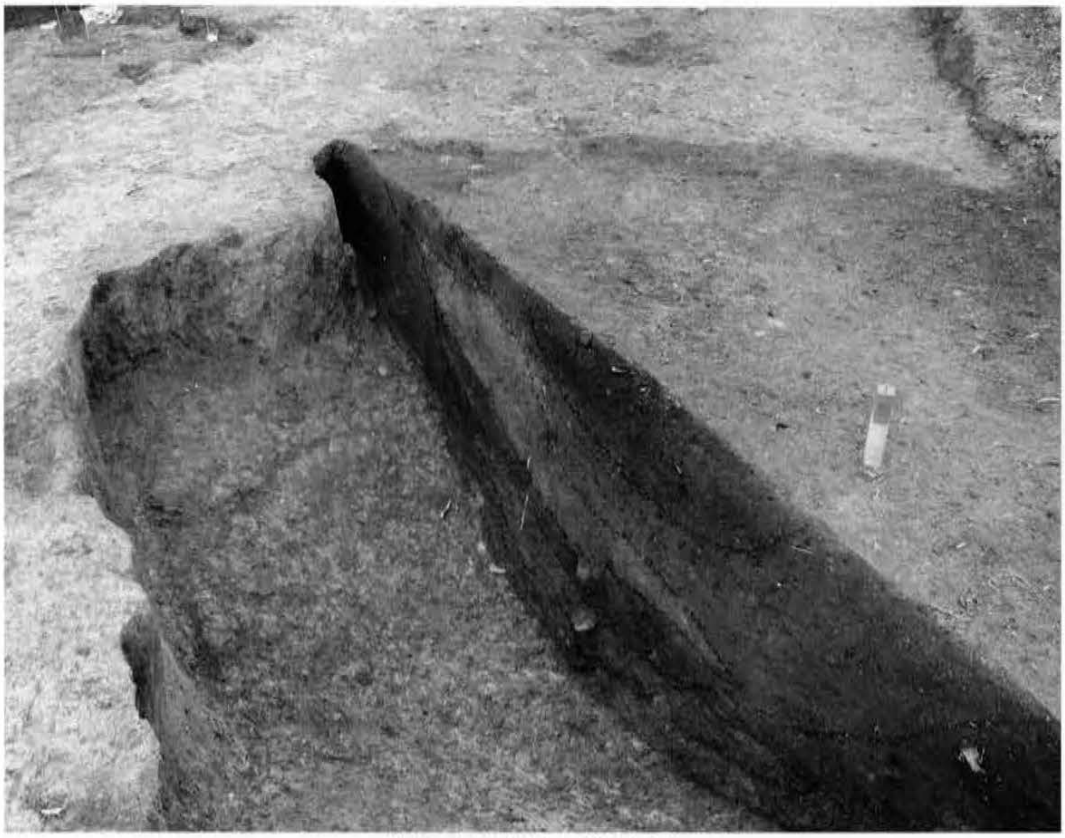
調査区全景（南から）

Pla.2

SK05検出状況（南東から）



SK05土層観察（南西から）



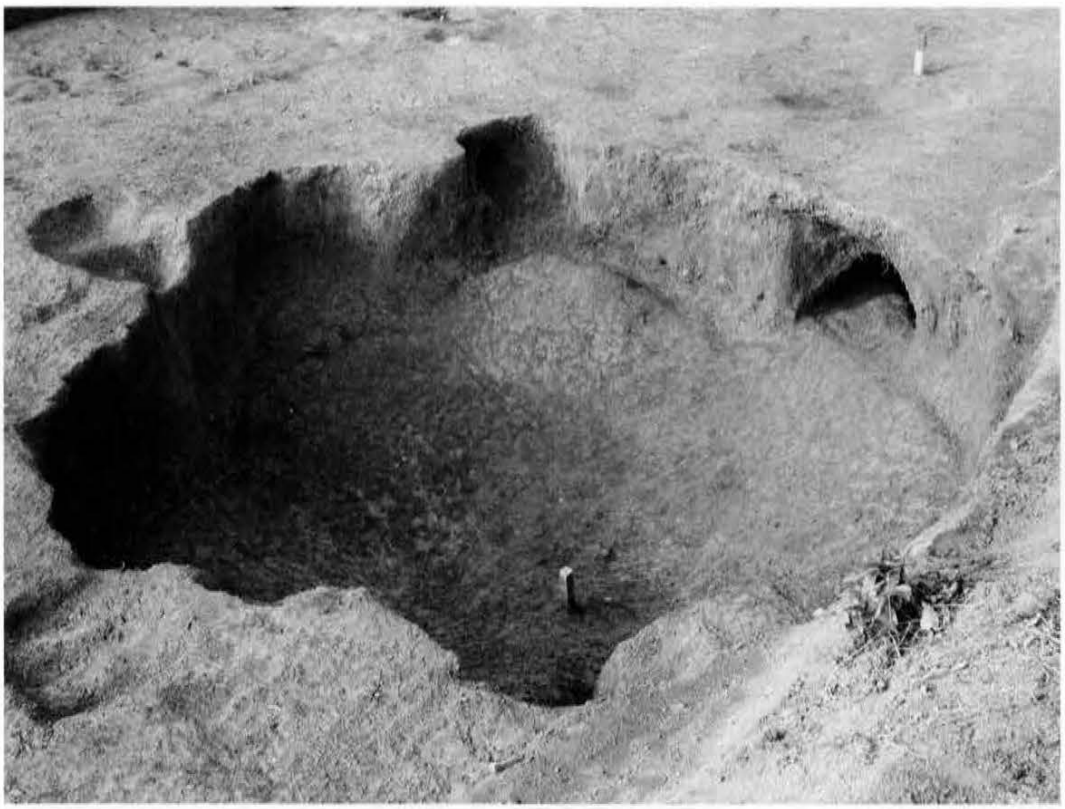
SK05土層観察（南から）

SK05土層観察（北西から）

SK05第1面（北西から）

SK05第1面（南東から）

SK05第1面完掘状況（北西から）



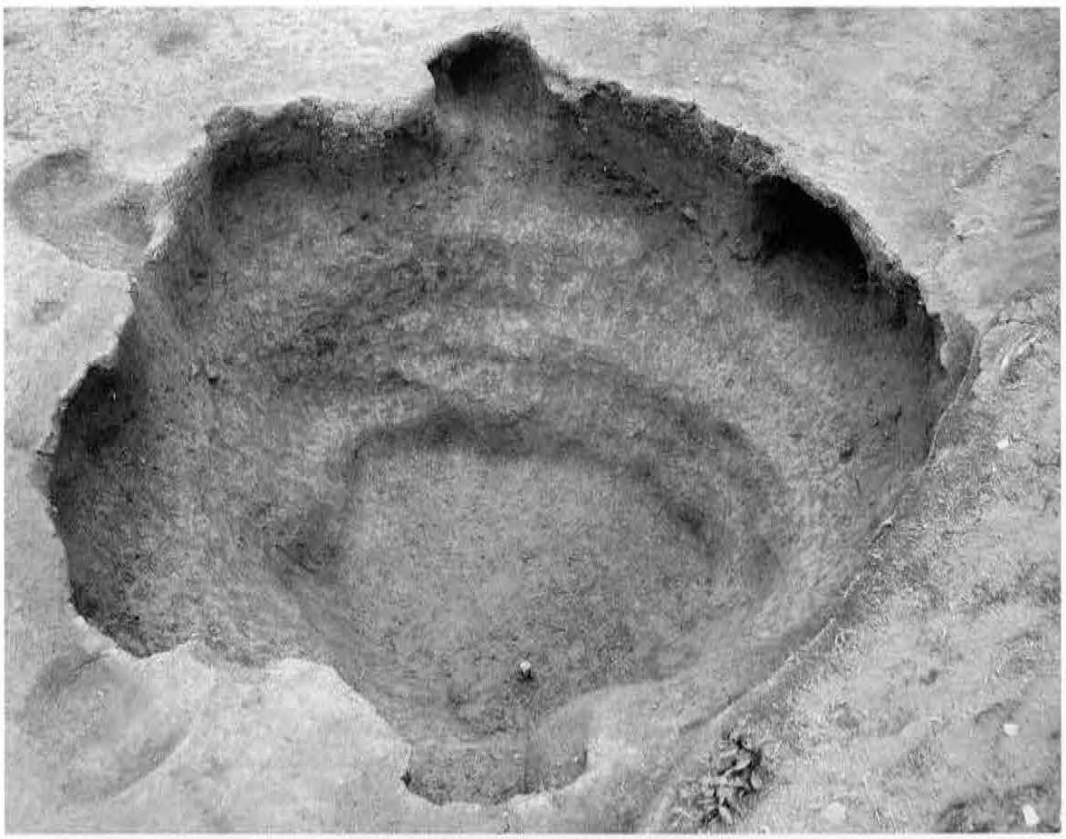
SK05第1面完掘状況（南東から）

SK05第1面横穴完掘状況（北西から）

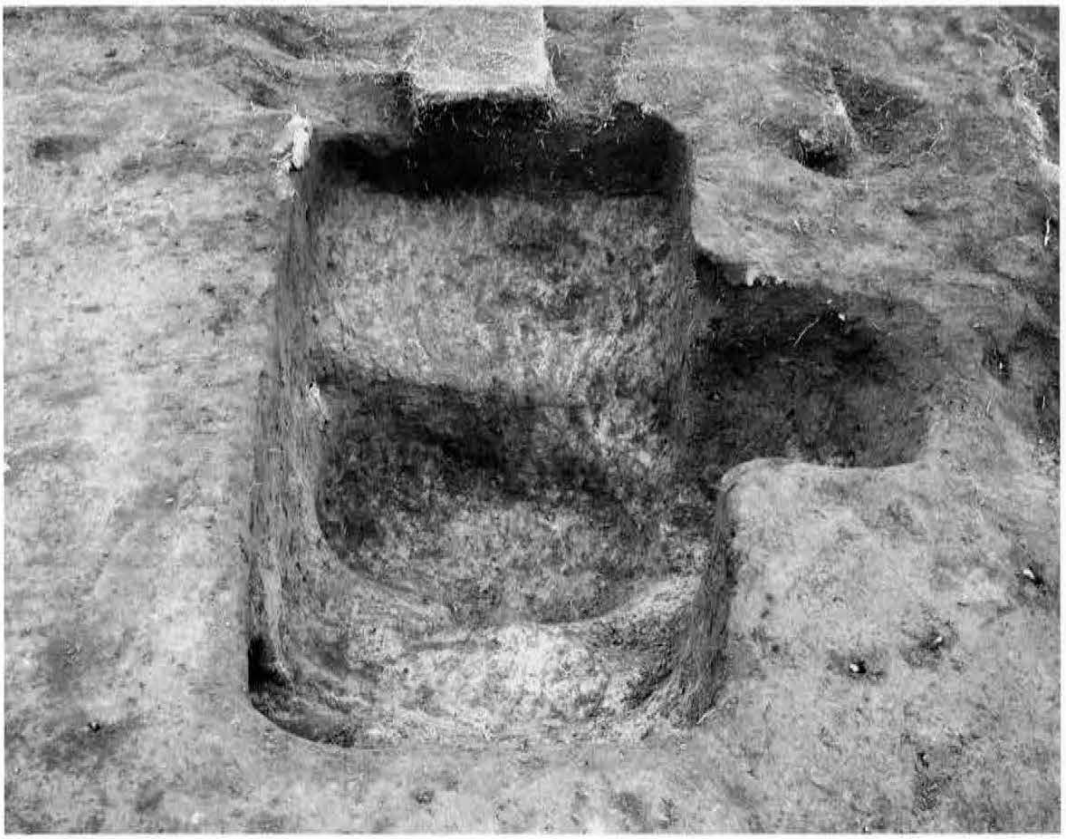
SK05突起部完掘状況（北西から）

SK05横穴突起部完掘状況（北西から）

SK05第2面完掘状況（南東から）



SK05第3面完掘状況（南東から）



SK15完掘状況（北から）

SK15完掘状況（西から）

SK15横穴状部分（西から）

SK01半裁状況（北東から）

SI01床面検出状況（北東から）

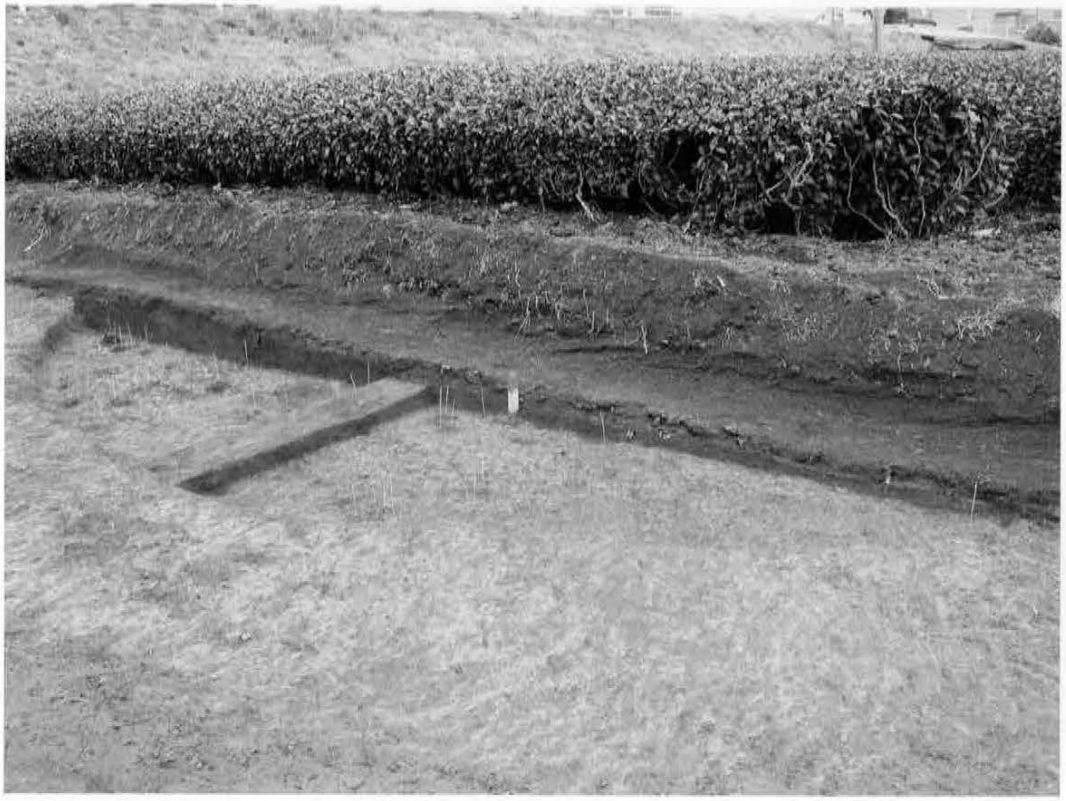
SI01床面検出状況（東から）

SI01南西隅土壙土層（東から）

SI01土製支脚検出状況（東から）

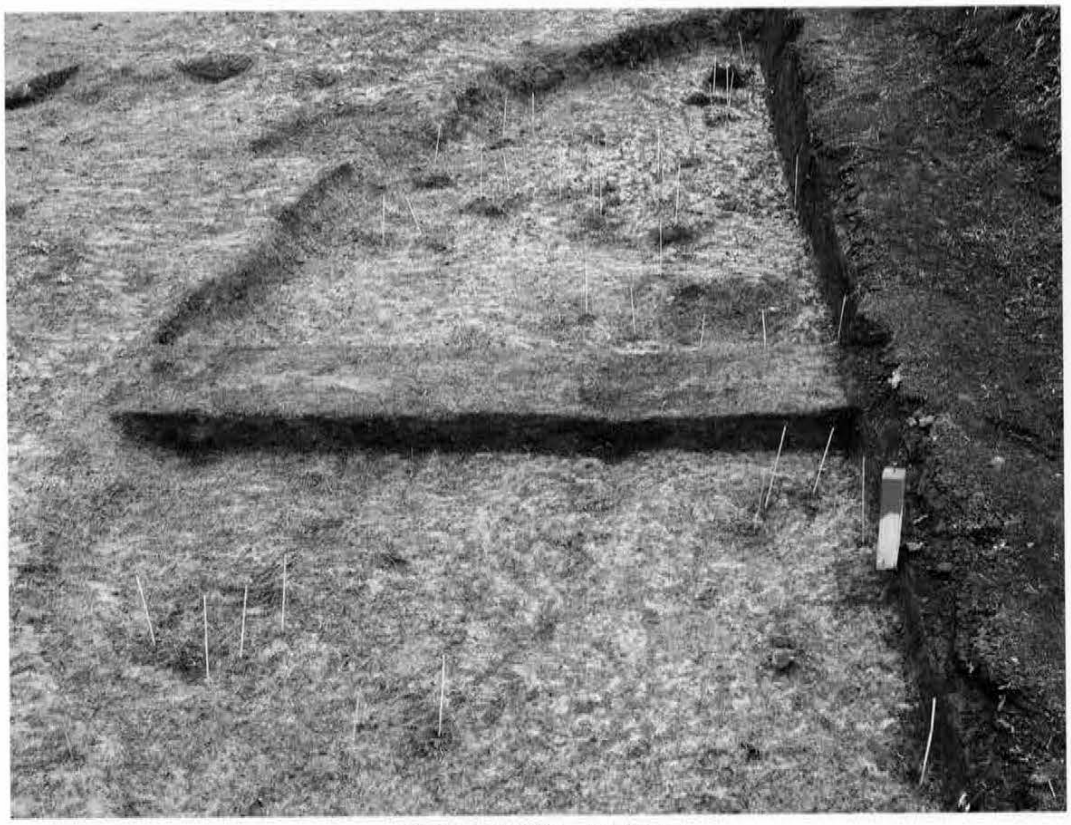
SI01完掘状況（北東から）

SI01完掘状況（東から）



SI10床面検出状況（南西から）

SI10床面確認状況（南から）



SI10土層観察（南から）

SI50検出状況（北から）

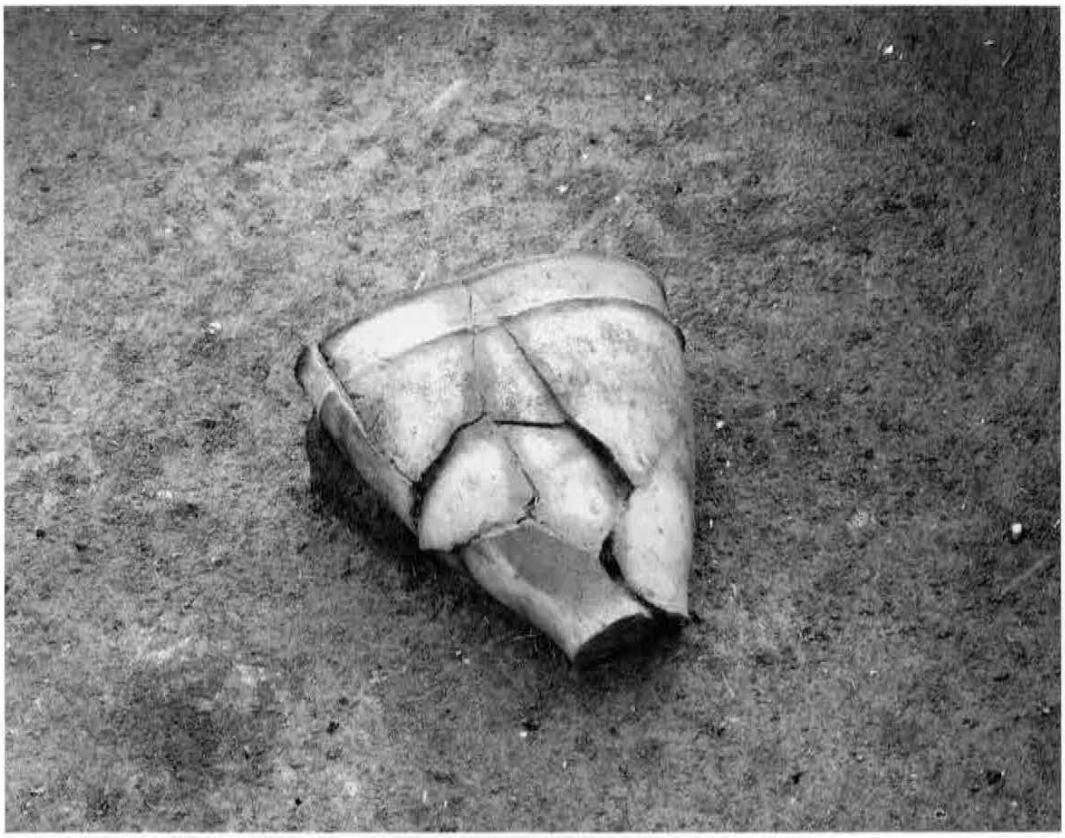
SI50完掘状況（南から）

SI10検出状況（南西から）

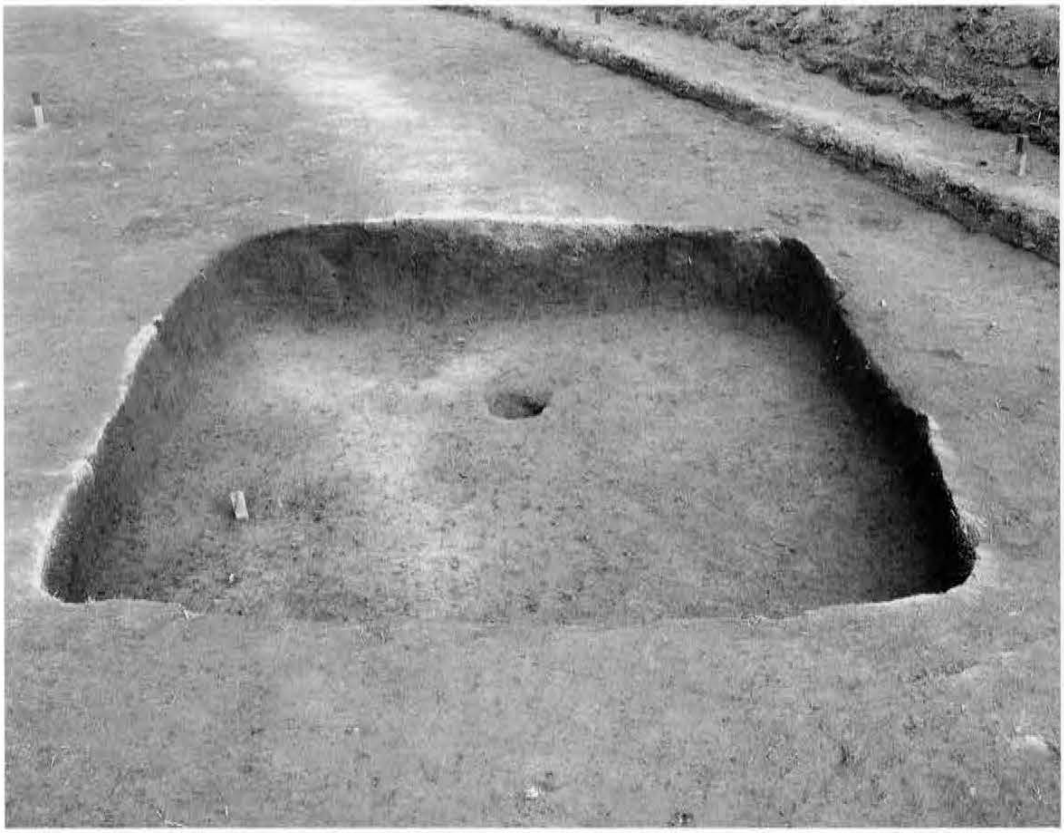
SI20土層観察（南西から）

SI20完掘状況（南西から）

SI20甕検出状況（西から）※小さい白い粒は雪

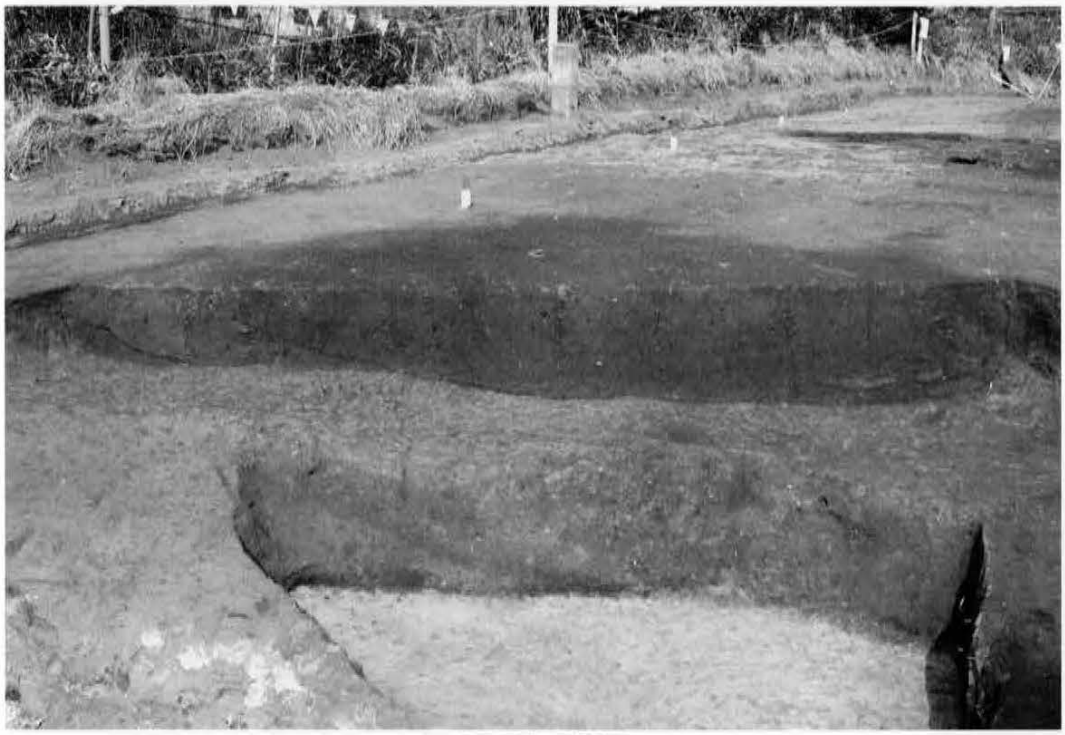


SI20検出状況（東から）



SI20完掘状況（南西から）

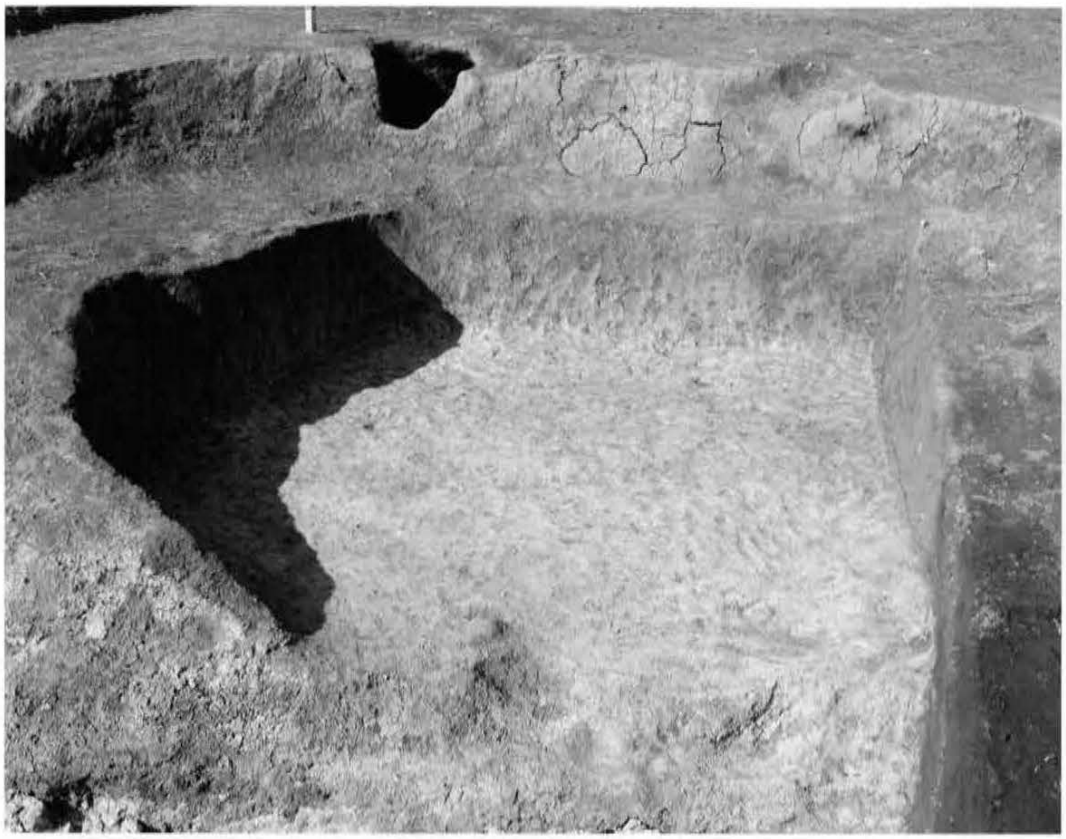
SI25検出状況（南から）



SI25土層観察

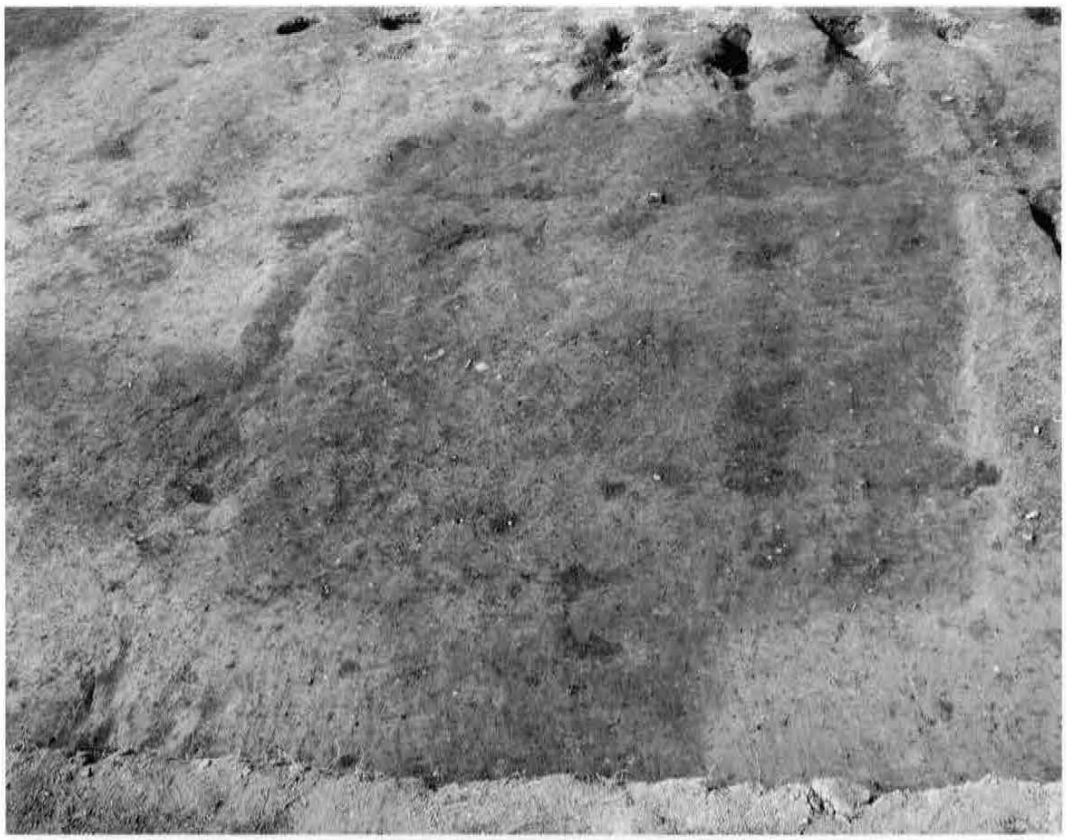
SI25完掘状況（南から）

SI25完掘状況（西から）
SI45検出状況（西から）

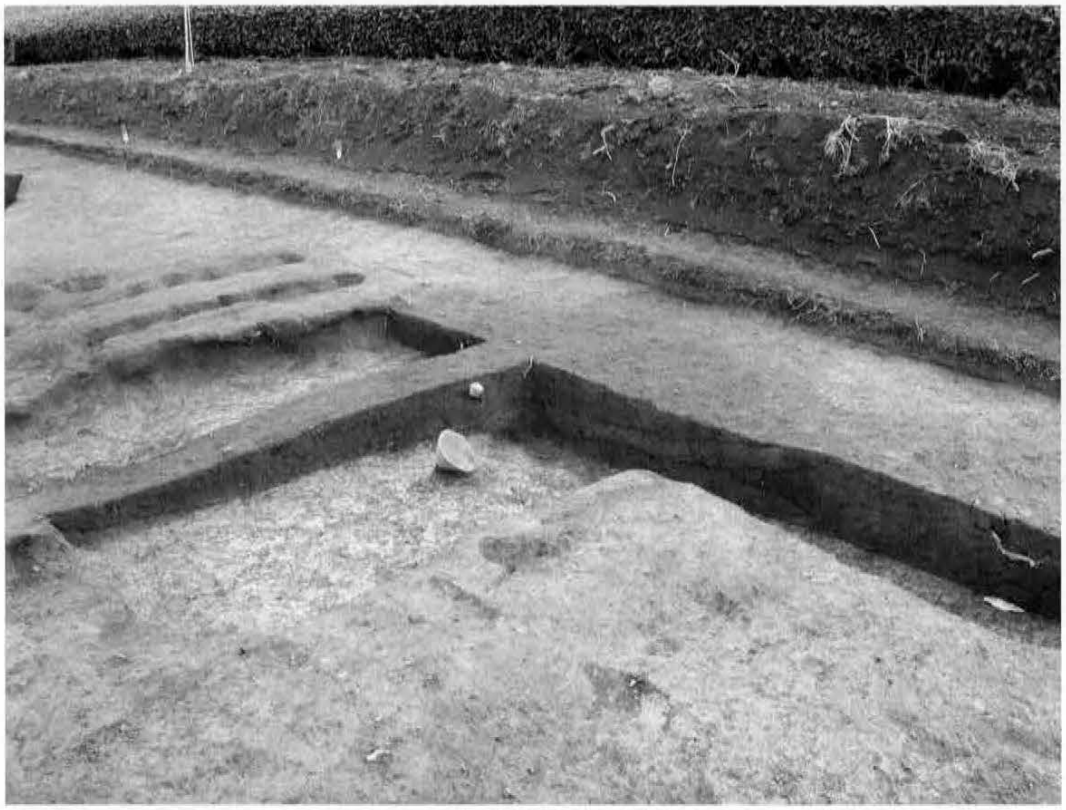


SI45完掘状況（南から）

SI45完掘状況（東から）



SI35・40検出状況（東から）



SI35・40土層観察（南西から）

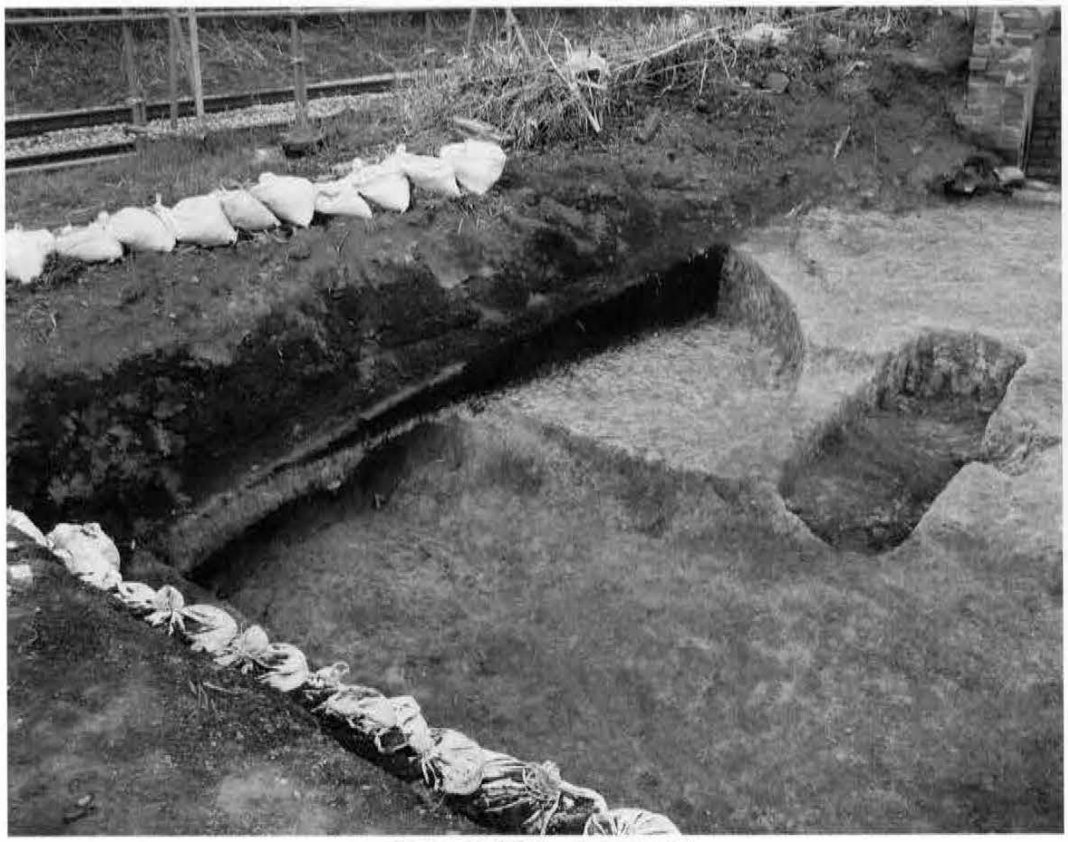
SI40土層観察（西から）

SI35・40完掘状況（南から）

SI35・40完掘状況（西から）

SI30土層観察（東から）

SI30完掘状況（南から）



SI30完掘状況（南東から）

SD55完掘状況（東から）

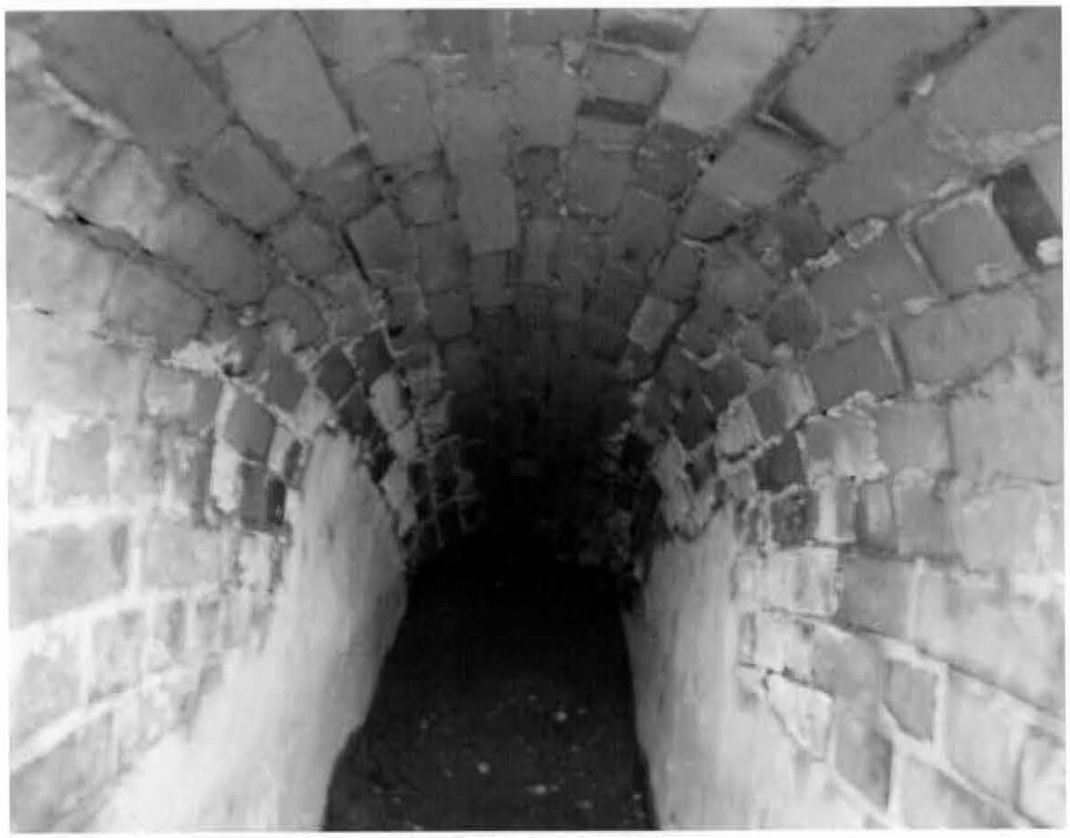
レンガ構造物検出状況（東から）

レンガ構造物検出状況（南から）

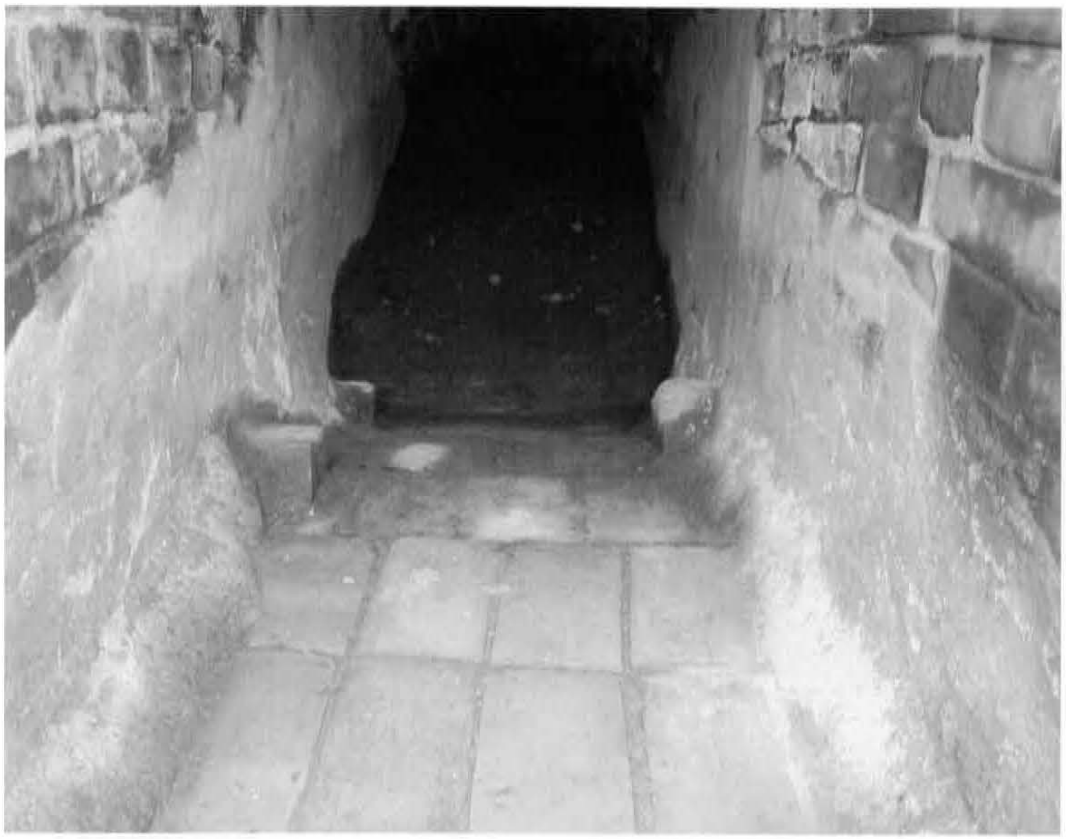
暗渠内レンガ（東から）

Pla.28

取水口状況（真上から）

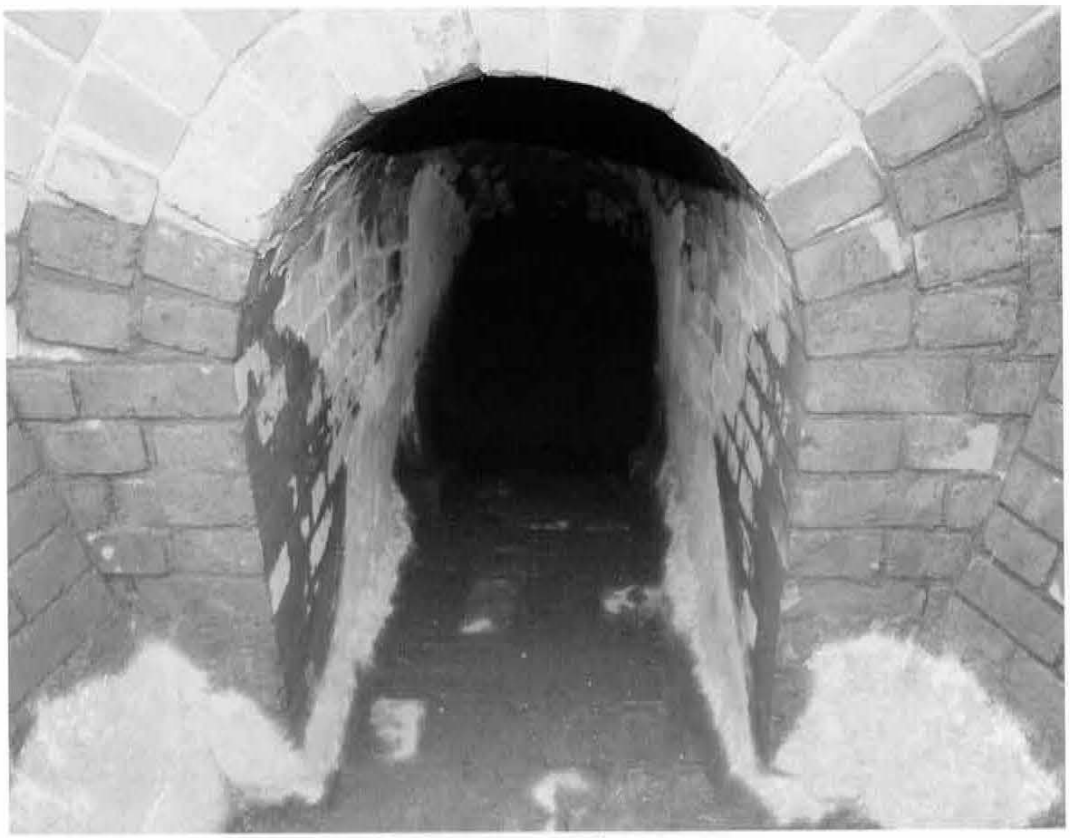


暗渠内天井部分



暗渠内（取水口付近）

暗渠内天井部



アーチ部分

SD55土層観察（西から）

1

5

12

3

6

13

4

7

14

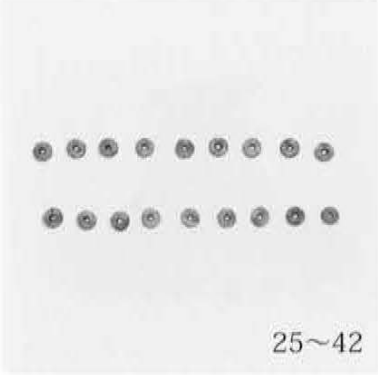
4

10

15

Pla.32

16


25～42

47

20

43

48

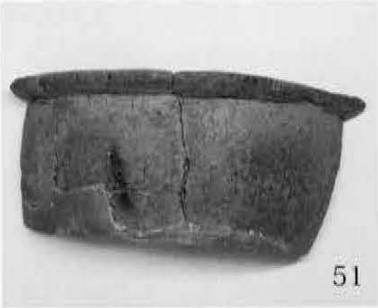
21

44

49

22

45


51

52

55

62

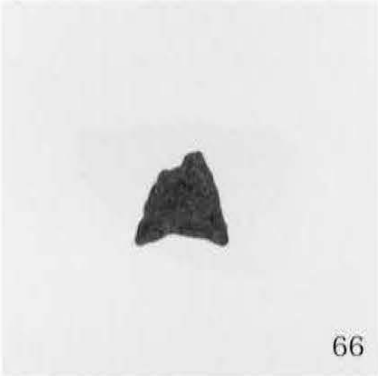
53

57

63

54

59


66

55

60

67

Pla.34

68

72

76

69

73

77

70

74

78

71

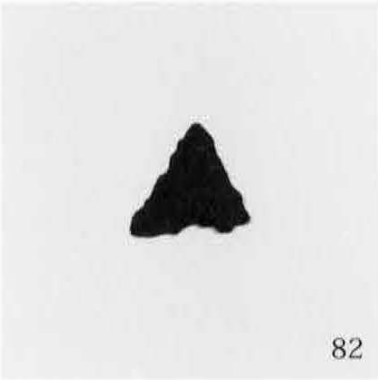
75

79

80

86

91


82

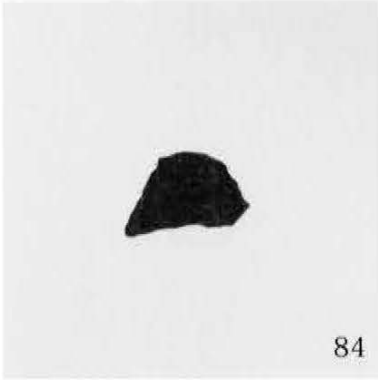
87

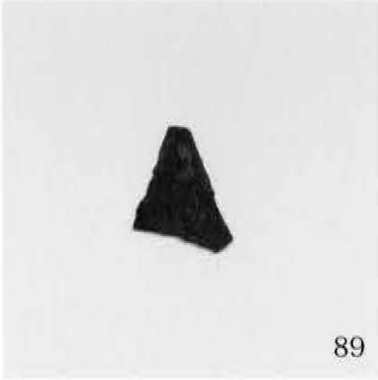
91

83

88

92


84


89

Pla.36

94

96

97

98

筑後市文化財調査報告書　第81集

蔵数立野遺跡

平成19年3月31日

発行　筑後市教育委員会
福岡県筑後市大字山ノ井898
TEL　0942-53-4111

印刷　大道印刷株式会社
福岡県春日市日の出町6丁目23番地
TEL　092-582-0927